

十日町市博物館研究紀要
BUULETIN OF THE TOKAMACHI CITY MUSEUM

No. 3

March 2024

十日町市博物館研究紀要第3号

目次

論文等

縄文給食を作る－総合学習プログラムの開発・実践から見える博学連携ネットワークの機能－

阿部 敬

1

地域博物館を考える（1）－調査・研究と普及活動－ 石原 正敏

13

縄文給食を作る

—総合学習プログラムの開発・実践からみえる博学連携ネットワークの機能—

Making the "Jomon" school lunch

: Functions of academic collaboration networks seen through the development and implementation of integrated study programs

阿部 敬¹

ABE Satoshi

新潟県十日町市の中条小学校第6学年の総合的な学習の時間に十日町市博物館として協力した。校区に火焔型土器(国宝)が出土した市史跡笹山遺跡が所在することから、学習の大きなテーマは縄文時代とし、具体的には縄文給食を作ることとした。これにあたり、博物館のほかには市教育委員会学校教育課及び中央給食センター、市内の飲食店、史跡で活躍するボランティア団体と協働して学習支援に取り組んだ。

博学連携の推進には、教員と学芸員の双方にある抵抗感を低減させることが重要である。本実践を含めたこれまでの事例を参照すると、多様な主体によるネットワークにより個々の教員や学芸員にかかる労力を分散させるとともに、コーディネーターを編成することで互いの能力や技術への漠然とした不安や茫然感を減らすことが可能と考えられた。

はじめに

十日町市は新潟県の中南部に位置する人口約4.9万人の市である。この地域の歴史文化として特徴的なものとして、火焔型土器を代表とする縄文文化、古代から続く織物、豪雪地の暮らしなどがある。

縄文時代の火焔型土器は国宝に指定されており、日本遺産「なんだ、これは？火焔型土器と雪国の文化」と日本遺産「究極の雪国とおかまち—真雪！豪雪地ものがたり」の構成物件となっており、十日町市の地域文化にとってはなくてはならない存在である。

国宝・火焔型土器が出土した笹山遺跡は市の史跡として整備されており、所管する文化財課や地域自治組織、地元団体によって定期的にイベントが開催されている。この遺跡は十日町市立中条小学校校区に位置することから、中条小学校の総合的な学習の時間（以下、総合学習とする。）では十日町市教育委員会文化財課が協力し、縄文時代に関連する授業を毎年行っている。本稿では中条小学校の総合学習の取り組みうち、令和3年度に行った縄文時代を題材にした博学連携の成果

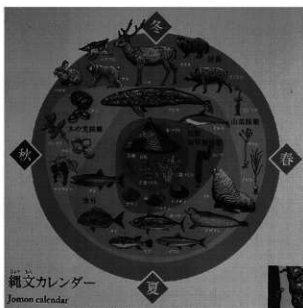
を報告した上で、連携に必要なネットワークおよびコーディネーターとの必要性とその機能について考察する。

1. 博学連携プロジェクト

新潟市、三条市、長岡市、魚沼市、十日町市、津南町で構成する信濃川火焔街道連携協議会は平成15年から火焔街道博学連携推進研究会（代表：金子和宏、小学校教諭）に委託して、「博学連携プロジェクト」と称し、新潟県立歴史博物館及び協議会加盟市町の博物館と複数の小学校との連携事業を展開してきた。総合学習の時間を利用し、縄文文化を題材にした体験学習、学校間交流、成果発表を行うものである。十日町市からは十日町市博物館と下条小学校、中条小学校、鏡島小学校、松代小学校などの参加実績がある。

しかし令和3年度は諸事情により、十日町市教育委員会で独自に、体験に絞った授業を実施することになった。鏡島小学校は従来通り土器作りを実施し、中条小学校は話し合いのなかで「新しいことを」という目

1 十日町市博物館 〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9



標をもって、今回報告する内容を実施することになった。

その内容とは、文化財課の提供する縄文時代の地域食材情報をもとにして、児童が献立を考え、実際に作って食べてみて、最後は給食の献立に編成するというものである。

2. 授業の経過

(1) 博物館展示の解説観覧

7月、十日町市博物館展示を学芸員(筆者)が解説しながら観覧してもらった。まずは縄文時代の全体像を学習するとともに、火焰型土器が鍋として使われていたこと、縄文人が自然に即した生活をして、季節に合わせた食べ物があったことなどを学習した。展示パネルにある「縄文カレンダー」(図1)はイメージを伝えるのに好都合であることを再確認した。ただしこのカレンダーは列島の各地域を広く扱っているため、例えば「トド」などの内陸ではありえない哺乳類が含まれているなど、地域の実態とは相違する部分があるため、口頭で補正して説明した。

(2) 出土資料から食材を抽出する

縄文時代の食については、出土資料の性質のために、分かっていることが非常に少なく、料理といえるものはさらに少ない。そこでまず、国立歴史民俗博物館の

番号	動物		
1	アオザメ		
2	アホボシ		
3	アヒ		
4	アヒ		
5	アヒ		
6	アヒ		
7	アヒ		
8	アヒ		
9	アヒ		
10	アヒ		
11	アヒ		
12	アヒ		
13	アヒ		
14	アヒ		
15	アヒ		
16	アヒ		
17	アヒ		
18	アヒ		
19	アヒ		
20	アヒ		
21	アヒ		
22	アヒ		
23	アヒ		
24	アヒ		
25	アヒ		
26	アヒ		
27	アヒ		
28	アヒ		
29	アヒ		
30	アヒ		
31	アヒ		
32	アヒ		
33	アヒ		
34	アヒ		
35	アヒ		
36	アヒ		
37	アヒ		

表1 動物の種類の一覧表の例

データベース(日本の遺跡出土大型植物遺体データベース)(国立歴史民俗博物館2006-2016)を利用し、新潟県内の遺跡出土資料(試料)から「食材」といえるようなものを抽出した。結果として動物門113種、植物門59種の名称一覧を作成した(表1)。

夏休みを挟んでの9月。収集した食材を一覧表にして印刷したものを授業で当該学級の全員に提供した。その後、11月の授業では、縄文時代の食材(以下、縄文食材)の多様さについて講義し、現代にあるものとないのの区別をすることについて対話形式でやり取りした。

現代の食卓では、外来種、輸入もの、ドメスティケーション(家畜、養殖、栽培)に向いているものを主に食べているが、天然資源に依存する縄文時代では、マメ類は栽培されていた可能性があるものの、そうした食材は限られていることや、食材となる種類の幅がかなり広がったことなどを学んでもらった。

(3) 食材を季節にわけ

食材には旬がある。では旬とは一体なにか。そう児童に聞かされると、その食材が「美味しい季節」だという。ではそれぞれの食材の旬はいつかと聞かせる

と、あまり知らないようだった。そこで縄文人の食材にも旬があったらという仮説のもと、次に縄文食材についてネット、本、家族に訊くなどして、季節ごとに分類する調べ学習をしてもらった。

(4) 実施季節にあった献立を考える

今般の授業では、スケジュール的に給食提供の時期が1月から2月の間になると予想されたので、晩秋から冬の食材と料理を考えてもらうことになった。

先の授業で季節に分類した食材のなかから晩秋から冬にあてられた食材を参考にして、班ごとに料理品目とイラストを作成してもらい、給食メニューのご飯またはパン以外のおかず、つまり主菜、副菜、汁物を構成することを目指した。調理の方法は縄文時代に行っていたことが想定できる、煮る、焼く、蒸すといった基本的なものとして考えてもらった。

6つの班から寄せられたメニューは、イノシシのステーキ、キジの唐揚げ、大豆の豆みそ、プリの照り焼き、魚介系のなべ、クジラ汁、アブラナのおひたしだった(図2)。特に奇をてらった様子はなく、また児童にあまり

人気のなさそうな食材(例えば貝類や川魚)は比較的少ない印象を受けた。児童にとっては食べたことのない食材は選ぶようになかったはずなので、その点から縄文人の食材の幅の広さを実感してもらえたのではないかと思っている。

なお9月の最初の授業からこの献立を作成するまでに5時間分の時間を要した。

(5) 料理人に協力して選定する

児童の考案した創作メニューは本当に美味しく食べられるものなのだろうか。料理の素人では判断がつかないので、市内の食堂・居酒屋「食楽空間だぼる」のオーナー・シェフ貝沢友哉氏に協力を仰いだ。貝沢氏は日本料理の修行を積んでおり、教育委員会文化財課が文化庁の補助事業を受けて開催している「十日町縄文ツアーズ」内の縄文レストランで腕をふるう料理人でもある。

まず給食に出せるほど量的にまとまって入手できる食材かどうか、価格、調理の難易度、美味しさ、組み合わせといった点で評価をいただき、主菜、副菜、汁物を各1品選定してもらった。この結果、選ばれたのが「猪のステーキ」、「味噌豆」、「鴨の吸い物」の3品である。

(6) 縄文料理を試作する

12月、採用された3品を実際に作って食べる授業を行った。上記3品については、事前に貝沢氏に味付けの調整をいただいて、食材の入手についても依頼していた。この授業には貝沢氏が講師となり、調理方法を指導していただいた。調理作業には笹山遺跡でボランティア活動を展開する伊乎乃の里・縄文サポートクラブ代表の阿部美記子氏からも助力をいただいた。

博物館からは、新潟県立歴史博物館から借用した黒曜石のナイフを提供し、包丁の他にこれで食材を切る体験もしてもらった。「意外と切れる」というのが大方の感想だった。

班単位で調理に臨み、全班が完成してから食事了。以下、調理と食味の感想を含む概要である。

A. 猪肉のステーキ

肉はブロックで購入していたため、講師が肉をステーキ用に班ごとに切って配布した。調理はフライ

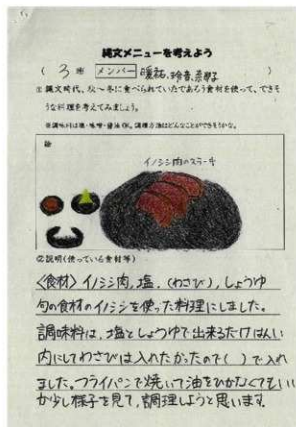


図2 縄文メニューの例



写真2 縄文メニューの試作の様子(左)と完成品(右)



パンで焼き、味付けは塩と胡椒にした。

野生獣の肉は加熱後短い時間で硬くなりやすい。食事の開始時間を合わせるので、調理が早く終わった班のものは硬くなってしまい、逆に遅い班のほうが柔らかくて美味しいという結果となった。美味しいという感想はしかし少数で、噛み切れずに吐き出してしまう児童や口をつけない児童もいた。

B. 味噌豆

味噌豆は大豆を甘味噌にあえた料理で、給食の人気メニューといわれており、児童のイメージもそれに沿ったものと想像された。市内の惣菜店でも、少し食味が異なるものが製造販売されており、「お弁当・お惣菜大賞 2023」(全国大会)にて最優秀賞を受賞したことで知られる銘品である。

実習では乾燥大豆を煎ってから甘味噌に絡めたが、味噌に含まれる少ない水分を吸った乾燥大豆に弾力を与え、一粒を噛み潰すだけでも一苦労の仕上がりとなってしまった。給食メニューや販売店のレシピなどを事前に調査しておくべきだった。

C. 鴨の吸い物

ネギ、椎茸、鴨の吸い物である。塩や醤油の加減で班によって味わいが大きく異なった。鴨を食べるのが初めてという児童の方が多かったが、それでもどの班のものも美味しかったようだ。3品の中では最も成功した料理である。

(7) 調理員との調整と給食への提供

児童の献立は、市教育委員会学校教育課を通じて給

食センターの栄養指導教諭に渡し、実現可能かどうかを協議した。栄養指導教諭の意見としては、小学生は初めての食材に忌避感を覚えるもので(低学年ほどこの傾向が強いという)、手をつけない可能性があること、また猪は好き嫌いが分かれ、食べ残しが多く出る可能性があること、さらには肉の費用が高く(牛肉と同程度以上)、かなり前からほかの日の給食の費用と調整し始めないと出来ないこと、加えて猪と鴨はともにこれまで使用したことがないから、まず食材の仕入れ先を探さねばならないとのことだった。結論から言えば、現実的ではないということのようだった。

これを受けて、学校側と再度検討し、給食では一部のメニューを次のように改めることにした。

- A. 猪のステーキ → 豚の生姜焼き
- B. 豆味噌 → (変更なし)
- C. 鴨の吸い物 → 鮭の吸い物

Aについては、豚は猪を家畜化したものであり、遺伝的には同属であることから入れ替え可能とした。Bについては、調理実習ではうまく作れなかったが、従来の給食献立と同じものとした。Cについては、鮭はかつて信濃川に大量に遡上しており、縄文人も大量に食していたと考えられているため、入れ替え可能とみなした。この変更は、その理由も含めて教諭から授業を受けた児童に伝えられた。

3月9日。中央給食センターから配られた市内の多くの小学校では、給食時の放送で次のような原稿が読

給食に、縄文メニュー登場



中条小学校では、6年生が総合的な学習の時間に縄文文化について学習しました。中でも、縄文の食に注目し、市博物館の監修で新潟県の遺跡で発見された食べ物を参考にメニューを考え、飲食店のシェフのご指導でイノシステーキやかも汁を作って試食しました。昨日は、かも汁ではなく、かも肉の代わりに鮭が入った鮭汁をいただきました。昔、信濃川には、鮭がたくさんあがってきたそうです。

昨日は、国宝・火焔型土器の作られた5千年前の人々の暮らしに思いをさせながら給食をいただきました。

【お知らせ】 2022-03-10 09:23 up!

図3 縄文給食（十日町市立中条小学校のHPより）

み上げられた。

「中条小学校では、6年生が総合的な学習の時間に縄文文化について学習しました。中でも縄文の食に注目し、市博物館の監修で新潟県の遺跡で発見された食べ物を参考にメニューを考え、飲食店のシェフのご指導で猪ステーキや鴨汁を作って試食しました。給食メニューにある鮭汁は、鴨肉の代わりに鮭を入れた汁です。信濃川には昔、鮭がたくさんあがってきたそうです。国宝・火焔型土器の作られた5千年前の人々の暮らしに思いをさせながら、いただきますよ。」

事前学習に参加していなかった他校の児童がこれをどう受け止めたかはわからないが、少なくとも中条小学校の授業を受けた児童は自身の成果に満足していたようである（藤ノ木氏談および図3）。

3. 博学連携について考える

(1) 博学連携の法的根拠と学習指導要領

博学連携という言葉が聞かれて久しい。この起こりは昭和26（1951）年に制定、昭和27（1952）年に施行された博物館法で「学校等の教育施設と協力し、その活動を援助すること」と規定されたことにある。施行から70年目の節目となる令和4（2022）年に制定された改正博物館法第3条1項12号でも「学校、図書館、研究所、公民館等の教育、学術又は文化に関

する諸施設と協力し、その活動を援助すること。」として引き継がれ、また同3項には「博物館は、第1項各号に掲げる事業の成果を活用するとともに、地方公共団体、学校、社会教育施設その他の関係機関及び民間団体と相互に連携を図りながら協力し、当該博物館が所在する地域における教育、学術及び文化の振興、文化観光（有形又は無形の文化遺産その他の文化に関する資源（以下この項において「文化資源」という。）の観覧、文化資源に関する体験活動その他の活動を通じて文化についての理解を深めることを目的とする観光をいう。）その他の活動の推進を図り、もつて地域の活力の向上に寄与するよう努めるものとする。」（太字は筆者による。）とされ、その目的と合わせ

て一層の明確化が図れたのであった。

このような博物館法に基づく博物館側からの「ラボコール」は決して一方的なものではなく、学校の側においても学習指導要領として明文化されてきた。平成元（1989）年改訂の小学校学習指導要領では、「指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い」の中で、「指導作成にあたっては、博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに、身近な地域および国土遺産や文化財などの観察や調査を行い、それに基づく表現活動が行われるよう配慮する必要がある」とされている（上門1993、中尾2023）。このような方針はその後も継続し、平成29（2017）年に大幅に改定された学習指導要領では、社会科のほかにも、理科、図画工作、美術、総合的な学習の時間にも類似の記述が見られる（表2）。学校教育における博物館や美術館の活用は幅広く推進されるべきことが明示されているのである。

(2) 学習指導案の重要性

十日町市博物館では以前から学校教育への支援を行っており、これまで主に3つの取り組みがある。一つ目は小学校第3学年の小単元「昔のくらしと道具」（名称は年度によって異動があるが、本論においてはこれに統一する。他の単元についても同様。）にあわせた内容で、民具の展示解説と使用体験で構成される。展示は旧博物館施設では常設展示となっていた移築古民家

教科	求められる学習内容	小学校	中学校
社会	博物館や資料館などの施設を活用を図ること	○	○
理科	博物館や化学学習センターなどと連携、協力を図りながら、それらを積極的に活用すること	○	○
図画工作	地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること	○	
美術	美術館・博物館と連携を図ったり、施設や文化財などを積極的に活用したりすること		○
総合的な学習の時間	他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと	○	○

表2 平成29年公示の学習指導要領にみる教科と博物館等との関わり

(文部科学省資料を筆者が再構成)

やロビーの特別展示を用いており、また石臼で大豆や米を挽く体験などが行われてきた。現在の新博物館においてもほぼ同様である。

この小単元への対応は、博物館としては最もオーソドックスといえるもので、沖繩県立博物館・美術館(上門1993)、埼玉県教育委員会の各博物館(内田2000)、朝霞市博物館(伊藤2014)、川崎市立博物館(土井2019)、戸田市立郷土博物館(最上2018)、横須賀市(内船2019)など、具体的実践例が文章化されているだけでも枚挙にいとまがない。当館と同様、年報等への報告にとどめている館も多いのではないだろうか。

二つ目は、第6学年社会科小単元「縄文のむらから古墳のくにへ」(同じく、以下「縄文のむら～」とする。)の冒頭に登場する縄文時代、もしくは縄文時代から古墳時代までに対応し、火焔型土器が国宝に指定されてから増築された新館の常設展示で解説を行っており、現在は新博物館の常設展示室で行っている。縄文時代だけでひとつの常設展示室となっているので、豊富な展示物にともなって解説も充実させやすい。縄文時代に特化した博物館や縄文時代が地域の歴史の一大トピックとなっている場合(例えば領家2009など)には似たような状況になっていると思われる。

三つ目は総合的な学習の時間(以下、総合学習とする。)であるが、これについては後述する。

上記一つ目と二つ目の対応は、小単元に寄り添った内容であるため学校側から具体的にどのような方向性をもって解説すべきか事前に要請される場合もあるが、これは少数派であって、多くの場合は単に解説し

て欲しい旨だけが伝えられる。「昔のくらしと道具」の場合は、解説現場で聞かれる教員の発言等から学芸員に求めている説明内容がおおよそつかめるので、双方の思惑に大きなずれ違いが生じていないが、「縄文のむら～」の場合は展示物に即した考古学的な観点からの説明なのか、平

等な社会から階層化社会や中央政権的な政治、経済、宗教への変化に焦点を当てるのか、あるいは変異に富んだ地域性を強調するのかといったように、視点の違いによって説明の内容は変わってくるので、現場感覚での対処は困難である。どのような事象を捉え、指導したいのか、教員の学習指導の意図や方向性をもとに学芸員が協力して授業構築を行う必要があるが、ほぼすべての授業で概要講話と児童との質疑応答形式のやりとりしか求められていないのが現状である。博物館展示物や収蔵資料を学習教材として提示する際には、個別の利用目的に応じた授業の展開が可能ながああり、その必要性は学年が上がるに従って増してくるのではないかと思われるが、実現に至る例はごく僅かである。

(4) 博学連携を拡張する二つの方法

博学連携には常に上記のような課題が内在しており、それゆえに解消方法が頻りに提起されてきた。しかしなかなか解消されているように見えないのはなぜだろうか。まずこの問題機制を探ってみよう。

高安礼士(2019)は他機関との協働の有無と事業の特徴とに応じて博学連携の実例をわかりやすく分類している。それによると、各事業には実際にはさまざまな目的が複合していることを認めた上で、「学校教育との協働事業」カテゴリには学校の利用目的と博物館本来の利用目的とのバランスにより、1)博物館資料や展示物を活用した学習、2)教科活動を目的とする利用、3)「総合的な学習の時間」としての利用、4)クラブなどの特別活動を目的とする利用、5)SSH(ス

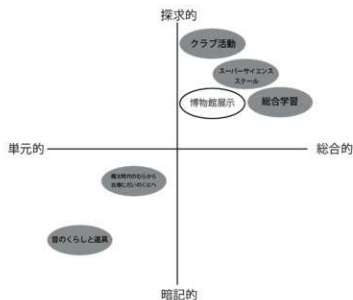


図4 博物館を利用した授業の性質

ーパーサイエンススクール)などの高度な内容の利用、を区別し、また「その他の機関・団体との協働事業」カテゴリには、6) 市民参画事業、7) 教員研修・学芸員実習、8) 他の博物館との連携事業、を区別している。

前者のカテゴリ内の順序は、博物館側から見た取組みの難易度に対応していると思われるが、ここではその分類を学校側から見て単元的か総合的か、暗記的か探求的かの2軸でとらえてみよう(図4)。

上述の「昔のくらしと道具」や「縄文時代の～」はこの図の第3象限に分布する。「昔のくらしと道具」よりも「縄文時代の～」のほうを探求・総合的寄りに配置するのは、学習内容が比較的高度で考慮すべき社会事象の複雑さが影響するためである。しかし、単元的であっても、それを暗記的か探求的かを決定するのは学習指導案を作成する教員の裁量であるから、それによって縦軸上方への変異幅は大きく、多様性をもつと予想される。総合性についても同様に多様性を付加しうるだろう。

一方、総合学習、クラブ、SSHは全て第1象限に含まれる。集団で取り組む探求学習であることが条件となるためである。これら3者間の分布位置の違いは構成する児童、生徒が合目的な集団かどうかにある。課題に取り組む集団がクラスや班といった得意や嗜好の異なる多様性の高いメンバーで構成されている場合、

チームワーク構築の困難性が相対的に高いために総合性が高くなり、同じ理由で探求性は相対的に低く抑えられると予想される。逆に特定の科目が得意で知識や技能の水準が高い、多様性の低いメンバーで構成され、且つ専門性を持つ教員がいるクラブやSSHの場合は、集団の目的が明確で集団の統率も取りやすいため総合性が低く、しかし高度な内容に取り組みめるために探求性が高くなる。

博学連携として実施されている各地の事業は、図4の第3象限を行うものと、第1象限を行うものがあるが、多くの博物館で博学連携として行っている事業の大半は第3象限への対応だろう。高安分類では2にあたる。

博物館の主要な機能的特性は、各学芸員のもつ専門性であり、その出力は資料展示およびその解説や論文執筆などの形でなされるのが普通である。よって学芸員が取り組みやすい博学連携も、この現実に近い内容になるだろう。おそらくさほど高いとは言えない総合性と高い探求性があると考えられるため、第1象限の左側に位置すると考えられ、学校教育の二つの集合(第3象限と第1象限)の間に挟まれる格好となる(図4)。したがって理論的には、充実した博学連携を行うには、グラフ上の左右へ拡張して重なるあう面積を増やすことが効果的である。

しかし学芸員は教員的な学習指導の訓練を受けていないため、単元の目的を知るには学習指導案等を交えた教員との密なコミュニケーションが必要となることは多くの事例が証明している。また児童、生徒がグループや班を編成して、互いの考えの違いを認め合いながら協力して課題解決に取り組んだり、人間関係の構築を行う(武子・森山2007)などといった学びの総合性についても、基本的には教員の指導が中心軸となる。もとより学習主体が児童、生徒である以上、その教育の全体像を計画し、進行させるイニシアチブを有するのは教員なので、当然といえば当然である。このことから博学連携の可能性は、まず教員との協働形態をどのように構築するかに依存しているといえることができる。

ただ、そのような協働関係が構築できたとしても、内容を質的に高めるには様々な制約があるのも事実である。たとえば教員の力量とそれを研修する指導力の

問題や(藤岡 2008)、地域の博物館で所蔵する実物あるいはデジタル情報が教材として提供できるかどうか(大井ほか 2024)、あるいは教育事業にかけられる学芸員の人員不足(日名知ほか 2022)などもあるだろう。しかし教育内容の質の高さの原資を教員と学芸員の力量や業務負荷、あるいはどちらかの機関の内部システム(そのシステム構築自体が大きな業務負荷となるのが現実である)に求めている、現場任せの現状を変えない限り、どちらかあるいは双方がもっと頑張るという力技の方法を導きやすく、問題解決への道のりをさらに遠いものとしがちなのではないだろうか。

(5) 抵抗感と現場のナラティブ

ではどうすればよいのだろうか。多くの教員と学芸員による献身的な努力が払われている中で、ここでは学校側と博物館側の双方にとって助力となりうる連携ネットワークに焦点を当ててみたい。特に注目するのは、博学連携にかかる「労力」と「茫漠感」といった心理的抵抗を低下あるいは分散するための機能である。

博学連携はそもそも学校が行う教育に外部人材と教科書からは得られない情報とを編入することで達成される教育形態のひとつであって、博物館は学校にとって数ある連携機関のひとつである。連携機関はほかの社会教育施設やそれ以外の公共施設の場合もあるし、民間企業もある。学校にはない有形無形の情報源を外部に依存することで成り立つ事業ともいえる。実施するときは第1に教員の果たす学習指導の役割の一部を連携機関に移譲し、第2に教科書にない情報の提供を期待している。

もしも期待される明確な役割の形や問題の在りどころが判明してにもかかわらず連携が進まないとするれば、連携そのものにかかる「労力」に対して得られる教育効果が高くないとみなされているか、もしくはそもそもその労力自体が忌避されている可能性がある。この労力のかかり方は、少なくとも初動においては、先述したようにほとんど教員側に求められるものであるから、それだけでひとつの障壁となるのである。

もうひとつの「茫漠感」とは、当該機関の潜在能力や人材の専門性が見えづらいことが教員に与える漠然とした不安やささやかな恐怖のことである。何ができるかわからない相手には先にそれ自体を尋ねなければ

ならないが、「あなたはなにができますか」と訊くのは実際勇気のいることである。市町村立学校と同立博物館との間柄は実は「身内」なのだが(註1)、それを知ってか知らずか、尋ねることを障壁に感じているという指摘もある。いっそのこといくつかのプランを提案し、どれならできるかを尋ねるという手もあるが、この場合は上述の労力問題に抵触してしまう。

行動心理学では、理屈として良いこととわかっていても関わらず、労力や茫漠感などの抵抗感が障壁になって、結果として従前と同じ行動をとってしまうという人間の性向(動物の生理的本能と言ってもいい)はよく知られている。ロレン・ノードグレンらによると、イノベーション、商品普及、業務刷新などを提案する際、何が良い点でどのような利益(様々な意味での)があるかを理を尽くして説明してもらうまいかないことが多いのは、①実際にはまだ見えていない新しいことへの不安や従前のおとりでありたいという「惰性」、②新しいことにかかる「労力」、③個人的なものも含む様々な「感情」、④説得されたり変化させられることへの「心理的反発」という4つの抵抗があるという(ノードグレンほか 2023)。このような抵抗がある場合、元となる商品やサービスの魅力や機能をいくら向上させても、またいくらPRしても、ほとんど効果がない。解決するにはそれを受け入れる内部組織や消費者の抵抗を下げるのが効果的である。

博学連携事業における主要な抵抗はこのうち労力や惰性あるいは茫漠感なのではないかと考えられるが、では逆に博物館側にはそうした抵抗がないかと言えば嘘になるだろう。博物館の抵抗としてあげられるのは学校教員側とはやや異なり、惰性と心理的反発ではないだろうか。

ところで我が国における博物館は、その初期において古今東西の文物をことごとく網羅し、諸説比較知識を開くとする方向と学校教育のためとする方向とがあったとされる。細かい経緯は省くが、前者は現在の東京国立博物館の全身となり、後者は国立科学博物館の前身となった(中尾 2023)。

当館を含めた人文系の博物館はおそらく主に前者の系列上において、学校教育への関与は積極的とまでは言えない状況が長く続いてきたのではないだろうか。もちろん一部にはそうではない博物館もあるから全てではない。しかしある県立歴史博物館で長く学芸員を

している職員から「教育とか普及って、学術よりもなんとなく下に見られている」との言葉を聞いたことがある。ごく最近でも、独立行政法人や公益財団法人に就職した若い知り合いの何人かが調査・研究部局ではなく教育・普及部局に配属されたことを嘆く声を聞いた。新十日町市博物館には基本計画が公表されているが、そこに掲載された基本理念、ビジョン、使命には「学校」の文字はなく、その下位の基本方針に初めてあらわれているのは偶然ではないだろう。筆者もかつてそうした感覚を共有していたように思う。

このような状況に対して十日町市内の自然史系博物館である十日町市立里山科学館「森の学校」キョロ口ではそもそも学校教育との連携は主要な事業の一角であって、複数の学校による研究発表会（「こども里山学会」）を長年主催してきた。また筆者の個人的な経験でも、子の自由研究の相談に乗っていただいたり、機材の貸し出しを受けたことは何度もある。その際、学芸員に「お忙しいところすみません」などと言ったら「全然。ウチはむしろそのためにあるの。」と言い切られ、なんとなく恥ずかしい思いをしたものである。

人文系博物館では、かなりの長期にわたり、自然史系博物館に比べて学校教育への関与にあまり価値をおいたり興味をもったりしない組織的あるいは学芸員の心理的な情性が働いていたということはないだろう。

情性という単語のニュアンスからすると、まるで断罪しているように聞こえるかもしれないが、筆者にそういうつもりはまったくない。ここでいう「情性」は

人間の行動心理の基本的作用として筆者を含めて誰にでもあることで、決して特殊なことではないからである。

もう一方の心理的反発については、なかなか表に出ることがないが、ひとつだけ貴重な例がある。前項で述べたように、博学連携の主体はあくまで学校や教員であって、どちらかというと「学校が」博物館および学芸員と協力するという色彩の強い事業ではあるはずだが、小学校の授業における博物館資料の考え方や扱い方が博物館学芸員のそれと一致しない点をひとつひとつあげつらった文章がある（三代 2010）。これはノードグレンらのいう「抵抗」のうち、協働を持ちかけた主体の言いなりになることへの心理的反発の表れといえるかもしれない。

以上の諸例は人文系と自然史系の博物館のデータを収集、比較した上での考察ではなく、あくまで筆者の耳目に届いた現場のナラティブの集積に過ぎないが、むしろそうであるからこそ生々しさを湛えている。学校だけでなく博物館においても、互いの連携にある抵抗を下げることも博学連携にとって重要な要素となりうると思われるのである。

(6) 連携ネットワークの形成

教員と学芸員との協働のためには、総合性を導ける機関や人材を組み入れた連携ネットワークの形成が重要である。高安（2019）の挙げた二つ目のカテゴリー「その他の機関・団体との協働事業」の特徴でもあり、これは学校側が求める博物館の学習機能と博物館側が

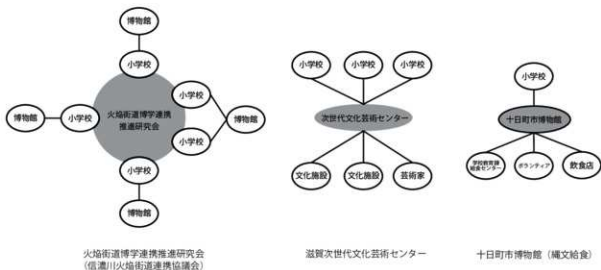


図5 博学連携ネットワークの諸相

持つ基本的機能とのギャップを埋め合わせる方法を内在する可能性がある。

連携ネットワークの中で最も重要な機能はコーディネートである。とすると中間的な立ち位置にある機関を想起しがちであるが、これまで報告された多様な連携のあり方を見ると、コーディネーターが所属するのはどの関係機関でも可能なようである。ここで二つの連携ネットワークのあり方を紹介してみたい。

ひとつ目は、新潟県中越地域で活動を展開した火焰街道博学連携推進研究会（のちに信濃川火焰街道連携協議会）の活動である（江口2005、金子・山本2007、金子2008、山本・金子2008）。この研究会は、域内の各自治体にある小学校と博物館を結びつけて基本的な博学連携学習を行い、さらにそれぞれの小学校が自治体を跨いで交流学習するというネットワークを形成した（図5）。

各自治体の博物館等ではそれぞれの学芸員が協力した。コーディネートを行ったのは小学校の教員だが、必ずしも参加する小学校の学級を担任する立場ではなかった。またそのパートナーとして新潟県立歴史博物館の学芸員が協力しており、教員コーディネーターとは逆に主として博物館側の調整や体験の技術支援を行っていたとみられる。

コーディネーターの存在の重要性についてはすでに論じられているが（江口2005、金子2008）、本論の視点では、教員が仲立ちをすることによって参加校教員による連携先との調整労力と茫然感が下がったことと、また同じく県立歴史博物館の学芸員が仲立ちしたことで、各自治体の博物館学芸員の安心感が醸成され、心理的反発が少なくなったことが重要と捉えられる。慣性の問題は依然として強いが、この事業が令和3（2021）年度まで17年間にわたって続いたことによって恒例化し、次第に和らいでいくのを筆者は感じていた。この事業は博学連携の極北というべきものだったといえるだろう。

もうひとつの例は、滋賀県の「滋賀次世代文化芸術センター」という特定非営利活動法人の活動である。この組織は県内の学校と博物館、さらに県内の芸術家をネットワークしてプログラム「文化芸術連携事業」を実施している。忙しい教員や学芸員に代わって事務的な調整を行うことで事業の迅速化を図っている。もとは子を持つ親が中心となって子どもの体験活動を充

実させる目的で設立したものが、公的補助を得られる組織に発展し、県の事業に組み込まれる形になったという。事務の具体的内容は、学校の希望する学習内容にあった文化施設や芸術家をつなぎ、各主体の調整、授業内容の検討、準備授業担当までをコーディネートするというものである（以上、木下2019を要約）。

この例でも、木下達文が「忙しい教員や学芸員に代わって」と記しているように、やはり労力の低減が重要なポイントであることは明らかである。そして何より子どもの親が主体となっていることで、学芸員や各施設に直接連絡を取るよりもはるかに抵抗の少ないやりとりが可能となっていると考えられる。

（7）「縄文給食」を連携ネットワークから見る

以上の2例はいずれも規模の大きさが際立っているため、小規模博物館とは次元が異なるという受け止め方をされるかもしれないが、そうではない。筆者が本論前半で報告した事例が、まさに小規模館における連携のひとつのあり方だからである。

学校教育に関わる部局（学校教育課、給食センター）、文化観光事業で関係した民間事業者（飲食店）、そして遺跡の活用事業で活躍するボランティア団体をつなぎ、担当学芸員ひとり（筆者）ではできない役割をそれぞれ担っていただいた。コーディネーターは学芸員自身であるが、もとより同じ教育委員会や各種事業を通じて旧知の間柄となっていた人々との調整に特に負担感はなかった。また教員の側では、一度博物館に相談に来ていただいてからは、電話とメールのやり取りを行っていただけであり、教員にとっては最初は勇気が必要だったかもしれないが、さほど濃密な連絡調整を必要とするレベルではなかった。

授業内容を教員でも取り組みやすい内容にしたこともこの事業の経過に寄与したことも付け加えておきたい。それは、縄文時代の食べ物や料理は、実は現代にも共通する自然史的側面を有するという点に特徴がある。要するに食べ物となる食材は自然にあるものであり、また煮たり焼いたりといった調理も普遍的な物理的作用に基づいているため、現代人でも理解がしやすいということである。このような側面に気づけば、縄文時代に固有の何か「研究テーマ」の大部分を占めることはなく、教員とも児童とも共通の言語で意思疎通が図れるのである。こうした意味では、食と同じく、

衣服や住居についても同様の取り組みが期待できるかもしれない。連携ネットワークの形成とともに、テーマの選択が連携の労力をはじめとする抵抗を減らすひとつの要因となりうることを覚えておきたい。

(8) まとめ

博学連携には教員と学芸員との密な意思疎通と学習内容の細部にわたる打ち合わせが必要だとする意見は異口同音に叫ばれてきた。また近年では博物館資料のデジタルアーカイブの公開や子どもや教員にとってのアクセシビリティの改善等が促されている。いずれも正しいと考えられ、これからも推進する必要があるが、一方でそれぞれの教員や学芸員が感じている抵抗を下げる努力も必要である。本展ではそのためのひとつの方法として連携ネットワークがもつ抵抗の低減効果に注目して論じた。職員ひとりひとりの心の声に耳を傾けることもまた博学連携の推進の一助となりうるのではないだろうか。

おわりに

担任の教諭に縄文給食を作ってみるのはどうかという提案をしたのは筆者だったが、それを受けて挑戦の意思を示してくれた教諭には感謝しかない。

協力する主体それぞれに思う方向性があるので、同じ事業の一部を担ったりするにはある程度の調整を必要とするが、地域の子どもの教育という目標を共有し得たことが大きく作用したように感じられた。学校にはそうした求心力がある。このような協力関係を構築する糸口は、地域の伝統文化とそれを大切に思う人々、教諭、子どもたちの意欲であることほど同じだろう。他の地域でもこうした展開ができれば期待している。

謝辞

藤ノ木様 氏には、本事業の連携にお声がけいただきました。また画像提供および事業内容の一部についても情報提供をいただきました。貝沢友哉氏と阿部美記子氏には事業の準備から教室での実習について、十日町市教育委員会学校教育課および給食センターの各氏には給食の提供についてそれぞれお世話になりました。金子和宏、山本哲也、藤岡達也各氏には文献のご提供をいただきました。以上の方々に末筆ながら記して感謝申し上げます。

なお本事業の必要経費は信濃川火焔道連携協議会の予算で賄った。

注

1：市町村立（政令指定市を除く。）の小中学校の教員はいわゆる異費負担職員である。給与は都道府県教育委員会から支払われ（市町村立学校職員給与負担法第1条）、任命権は都道府県教育委員会にあり（地方教育行政の組織及び運営に関する法律第42条）、勤務条件等は都道府県条例の定めに従う（同法第47条）、身分は市町村教育委員会である（文部科学省ホームページ）。博物館が教育委員会部局となっている場合、例えば十日町市立小学校・中学校と十日町市博物館はともに十日町市教育委員会の部局であり、その職員の身分もまた同様である。

引用参考文献

- 日名知雄斗・深谷圭助 2022 「日本の博物館教育における学校連携の必要性に関する一考察」『現代教育研究紀要』16, p.77-84
- 文部科学省 ホーム ページ https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyujyo/1394392.htm (2024年3月確認)
- 藤岡達也 2007 「総合的な学習の時間における環境教育展開の意義と課題」『環境教育』17(2), p.26-37
- 伊藤麻紀子 2014 「博学連携事業「小学校3年生『むかしのくらし』の実践と見直し」」『朝霞市博物館研究紀要』14, p.13-20
- 金子和宏 2008 「子どもの学びを核とする博学連携組織の開発とコーディネーターの役割」『教育実践研究』18
- 金子和宏・山本哲也 2007 「博学連携組織の開発と実践」『日本科学教育学会研究会研究報告』24(4), p.58-63
- 上門清春 1993 「博物館における教育普及活動の取り組み」『沖縄県立博物館紀要』19, p.41-55
- 木下達文 2019 「コラム 中間支援組織による博学連携活動」『現代博物館学入門』, p.57-58、ミネルヴァ書房
- 三代様 2020 「学校教育における民営の活用」『民営研究』161, p.55-59
- 藤上志乃 2018 「学校の博物館利用と常設展示室・復元民家の活用について」『戸田市立郷土博物館研究紀要』28, p.31-40
- 長崎歴史文化博物館 2018 『長崎歴史文化博物館 教育実践報告書 博物館と学校をつなぐ学びと実践』
- 中尾智行 2023 「博学連携の展開と新しい学び」『中等教育資料』1046, p.30-35
- ノードグレン, ロレン, デイヴィッド・ショナル 2023 「変化を嫌う人」を動かす 魅力的な提案が受け入れられない4つの理由」, 松本謙一監修、川崎千歳 訳、草思社
- 大井利生・宮田諭志・中森康人・榎本剛治 2024 「問い」の創発と多面的な学びを支援するデジタルアーカイブ展示と実空間の架橋」『デジタルアーカイブ学会誌』8(1), p.15-20
- 武子昭宗・森山賢一 2007 「博物館における「総合的な学習の時間」への支援の内容と方法に関する考察」『教育実践学研究』11, p.25-4
- 内田正善 2000 「博学連携体験学習の理論と実践」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』22, p.1-14
- 土井和真 2019 「本物を「見る」「さわる」って楽しい！ 出前授業は博学連携の第一歩」『協働する博物館 博学連携の充実に向けて』, p.88-115, ジダイト社
- 内給俊樹 2019 「つながり」を生かした小学校教育支援 学校へ、地域へ「つながる博物館」の取り組みと挑戦」『協働する博物館 博学連携の充実に向けて』, p.186-197 ジダイト社
- 高安礼士 2019 「博学連携で博物館に求められること—博物館が取り組むカリキュラム開発を中心に」『協働する博物館 博学連携の充

裏に向けて」、p.326-335、ジダイ社

領塚正浩 2009 「学校と博物館をつなぐ「編文体験学習」『歴史地理教育』743、p.26-31

山本哲也・金子和宏 2008 「史跡、博物館と地域連携」『國學院大學考古資料館紀要』24、p.107-120

地域博物館を考える（1）－調査・研究と普及活動－

Consider of the regional museum 1: Research study and popularization activities

石原 正敏¹

ISHIHARA Masatoshi

新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）は、令和2（2020）年6月に開館した。新博物館の基本理念は、「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」である。十日町市の多様で豊かな自然と歴史・文化について、市民・来館者と共に探求し、保全・継承し、その価値を国内外に発信することをビジョンとしている。新博物館は生涯学習の拠点であるとともに、情報発信の拠点という機能を有し、4つの使命を掲げて活動している。

本稿では、旧博物館開館までの経緯や博物館と文化財課の30数年の関わりについてふれ、資料の収集、整理、保管（収蔵）、調査、研究、文化財指定や保存・活用について紹介するとともに、地域博物館の現状と課題について考察する。博物館活動においては「調査研究」、「情報発信と公開」が喫緊の課題であり、文化財の指定及び保存と活用においても、多くの課題がある。それらを踏まえ、課題解決に向け、新たな方向性を見出していく必要がある。

1. はじめに

十日町市博物館は、昭和54（1979）年の開館以来、「妻有地方の自然と文化」をテーマに、基本理念に掲げた「市民生活に密着した実物教育機関として、いつでも誰でも見たり、調べたりできる、市民のための博物館」を目指して様々な活動を展開してきた（波形1994、竹内2002ほか）。友の会活動など地域に密着した博物館活動を着実に展開している点が評価され、平成3（1991）年に文部省が推薦した全国の特徴ある博物館24館の1つにも選ばれている。

そして、平成26（2014）年から準備を始め開館41年目となる令和2（2020）年6月に新しい十日町市博物館（以下、「新博物館」）がオープンした。新博物館の基本理念は、「市民・来館者と共に考え、活動し、成長する博物館」である。十日町市の多様で豊かな自然と歴史・文化について、市民・来館者と共に探

求し、保全・継承し、その価値を国内外に発信することをビジョンとしている。新博物館は生涯学習の拠点であるとともに、情報発信の拠点という機能を有する。「市民の知的関心に応えるため、資料や情報を収集・保存、調査・研究、展示・普及し、生涯学習の拠点としてその役割を果たす」、「地域の歴史や文化に対する市民の理解を深め、市民と共に新しい価値を創造する」、「魅力ある財産として地域固有の歴史・生活文化・産業に光をあて、その活用を通じた来館者との交流により地域振興に貢献する」、「市民及び来館者と対話しながら共に成長し、博物館友の会、他の博物館・関係機関と連携して活動する」の4つの使命を掲げて活動している。

前々稿では、旧博物館における40年の活動の歩みを振り返り、耐震改修・展示リニューアルから新博物館の建設への方向転換、新博物館の展示の特徴、開館

1 十日町市博物館 〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9

後およそ1年半の運営にあたって留意したことなどについて紹介した。合わせて、雪文化三館提携や信濃川火焔街道連携協議会など広域連携や地域連携の取り組み、文化資源の魅力増進の取り組みなどについて紹介するとともに、今後の課題等について考察した(石原2022)。前稿では、資料の収集・整理・保管、調査研究活動、実物資料・写真資料など資料の貸出、博物館実習・職場体験、史跡の保存と活用などについて紹介するとともに、現状と課題について考察した(石原2023)。しかし、調査研究活動における文化財課と博物館の関係性、文化財課の文化財保護と埋蔵文化財の関係性などについては、取り上げることができなかった。本稿では、旧博物館開館までの経緯や博物館と文化財課の関わりについてふれ、新博物館開館後のおよそ4年間を振り返るとともに、関係データを再整理し、地域博物館の現状と課題について考察する。

2. 資料の収集・整理と調査研究について

(1) 博物館と文化財課の機能

「博物館ハ世界中ノ物産、古物、珍物ヲ集メテ人ニ示シ、見聞ヲ博クスルヲメニ設ケルモノナリ」これは、福澤諭吉が「西洋事情」で記した一節である。福澤は1862年に遣欧使節団の一員としてフランス、イギリス、オランダ等を視察し、わが国に「博物館」の意味を初めて伝えたと言われている。「集メテ(=収集)人ニ示シ(=展示)、見聞ヲ博クスル(=教育)」という表現は正的を射ている。

博物館法の第1章第2条で、「博物館」は「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して、教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」と定義されている。博物館を教育機関とする所以はここにあり、この教育的配慮が現在の博物館事業の根底にある。一方、教育機関としてのあり方は別に、博物館法において博物館は研究機関であると規定されている。博物館法の第3条第1項には、その四に博物館の事業として「博物館資料に関する専門的、技術的な調査研究を行うこと」を掲げ、博物館の調査研究の重要性を述べている。この専門的な調査研究の担い手は学芸員であ

る。学芸員については、博物館法第4条第3項に、博物館の専門的職員としての学芸員の位置付けが規定され、同第4項には「学芸員は、資料の収集、保管、展示及び調査研究をはじめ専門的事項をつかさどる」として、博物館の専門的な調査研究が主として学芸員に委ねられていることが明記されている。

文部科学省は、「社会教育行政に必要な社会教育に関する基本的事項を明らかにすること」を目的とし、3年ごとに社会教育調査を実施している。直近の2021(令和3)年度調査結果では、博物館数(博物館登録施設、相当施設、類似施設)は5,771館(2018年度調査では5,738館)であった。全国では1市町村に平均3.3館の博物館があることになる。学芸員数は9,036人(2018年度調査は8,403人)であった。前回調査から数は増加しているが、正規職員の割合が減少し、非正規職員の割合が増加傾向にある。

博物館には、いわゆる「表の顔と裏の顔」がある。資料の収集、整理、保管(収蔵)、調査、研究という仕事は裏の顔であり、展示や教育普及などが表の顔である。新博物館においては、文化財課と博物館という2つの組織が、車の両輪のごとく日々の業務に取り組んでおり、調査研究活動の多くを文化財課が担っている(石原2023)。

(2) 十日町市博物館の開館

十日町市の文化財行政は当初、社会教育課が担当していた。昭和34(1959)年の小坂道跡の発掘調査はもとより、民具の収集なども社会教育課で担当していた。昭和40年代に入って社会教育課では、このまま放置しておくとも民具がなくなってしまうと考え、小中学校を通して民具の収集を開始し、昭和45(1970)年には民具展が市民体育館を会場に開催された。神宮寺「本尊・木造十一面千手観音立像」の新潟県文化財指定が契機となり、文化財保護の機運が高まり、昭和47(1972)年4月には旧条例を全文改正して新たな十日町市文化財保護条例が施行された。その後、昭和48(1973)年から昭和53(1978)年まで、立教大学の学校・社会教育講座学芸員課程の協力を得て、「十日町市における文化財の調査」が行われ、昭和49(1974)年から昭和51(1976)年には「十日町市広域パイロット地域内の遺跡群調査」が実施された。昭和47(1972)年に市総合計画の中に郷土資料館建設

の構想が打ち出され、その後に行われた県内屈指の古代集落遺跡（馬場上遺跡）の発掘調査を契機として、にわか蔵・展示施設整備の機運が高まった。そして、昭和49（1974）年11月に文化財調査審議会が教育委員会に対し、収蔵施設と公開できる施設（資料館）を早急に建設するよう建議書を提出した。旧博物館は翌50（1975）年から約4年間の準備期間を経て開館の運びとなったが、この建議書が昭和51（1976）年の埋蔵文化財収蔵庫建設、昭和53（1978）年の博物館建設、昭和54（1979）年の博物館開館へと繋がった。

（3）文化財課の設置とその歩み

旧博物館が開館した昭和54（1979）年からしばらくの間、文化財担当は社会教育課、発掘関係は博物館と、担当部署が行政組織と教育機関に分かれて不便をきたしていた。発掘調査事業の増大等に対応するため、昭和62（1987）年4月より社会教育課に文化財係が設置されたが、実体は文化財関連業務を全て博物館に移し、考古学専攻の学芸員を増員したものであった。しかも、辞令は社会教育課文化財係で、係長は博物館副館長の兼務でありながら、博物館長とは別の社会教育課長の下に属す、また、職員も文化財係の実務は博物館で行いながら、社会教育課文化財係として、兼務の博物館職員とは違う決裁区分に属すという、依然として変則的な組織であった。その後、行政の体制整備が叫ばれ、博物館の整備を含め文化・文化財行政が見直されて、3年後の平成2（1990）年4月に文化財課が誕生した。以来、文化財担当部門は社会教育課を離れて独立し、文化財課の職員として博物館職員を兼務し、文化財に関する業務全般にあっている。文化財課の歩みは、別表のとおりである（第1表～第4表）。

平成17（1995）年の市町村合併により新十日町市が誕生して間もなく20年が経過する。文化財課は「地域文化の向上に資するため、文化財の調査、研究、保存、管理をはかること」を課の方針とし、文化財係は平成24（2012）年に文化財保護係と埋蔵文化財係の2係に分離され、現在に至っている。文化財課は主に(1)文化財保護調査事業、(2)文化財保存修理事業、(3)古文書等歴史資料整理事業、(4)遺跡発掘調査事業、(5)埋蔵文化財等調査報告書作成事業、(6)火焰の都整備事業、(7)資料館等維持管理事業などに取り組んでいる。(1)～(3)、(7)を文化財保護係、(4)～(6)を埋蔵文化

財係がそれぞれ分享している。発掘調査一覧は別表のとおりである（第5表～第7表）。

（3）調査研究と文化財指定

重要な有形民俗文化財「越後縮の紡織用具及び関連資料2,098点」（昭和61年3月指定）、同「十日町の積雪期用具3,868点」（平成3年1月指定）、火焰型・王冠型土器群をはじめとする国宝「新潟県笹山遺跡出土深鉢形土器57点（附871点）」（平成11年6月指定）は、関係者の不断の努力によって生み出されたものである。

旧博物館においては、開館準備段階から収集・保存してきた越後縮関連資料をより充実し、きちんと整理して後世に伝えるとともに、国の文化財指定を受けようという本格的作業に入ったのは、昭和57（1982）年度からであったという。文化庁の天野主任文化財調査官などの指導を得ながら整理が進められた。「調査、写真撮影、計測、作図、台帳作成と、1点ずつの大変手間のかかる作業であったが、職員だけでは手が足りず、臨時職員やパートを頼み、4年がかりで2,098点のコレクションを完成させた。当初、集まった資料の中には修復を要するもの、用途不明のものなどが、その都度、確認作業や調査で苦労したことも度々であった。技術的に不明の点は、松之山や小千谷・塩沢などへ飛んで現地調査を行ったほか、「縮織り」の周辺を固めるために大勢のお年寄りから聞き取り調査を行ってきた」と、当時の職員が熱く語っていたことが思い出される。昭和62（1987）年度からは、引き続き十日町の雪に関する民俗資料の整理に入った。約5年の歳月をかけ、3,868点という膨大な資料を分類・整理し、重要な有形民俗文化財の指定を受けることができた。この2つのコレクションは、数多くの市民の皆さんをはじめとする関係者、関係団体のご協力で出来上がったものであることを忘れてはいけないだろう。また、旧博物館の展示解説書もこの時期に作成されている（十日町市博物館編1981・1982・1983・1984・1987）。当時の関係者のご尽力に敬意を表する次第である。

笹山遺跡出土品は、発掘調査後の数年にわたる整理作業、調査研究などを経て、昭和61（1986）年秋に展示公開され、平成2（1990）年2月に市の文化財指定、翌3（1991）年3月に県の文化財指定、そし

て翌4（1992）年6月に国の重要文化財指定と、異例の速さで文化財指定の階段を昇りつめた。笹山遺跡出土品が注目される中、市では平成9（1997）年度から発掘調査と整理調査を並行して行う体制を組み、その時点でまだ調査報告書を刊行していなかった遺跡の中から、火焔型土器などの重要文化財を保有する笹山遺跡を選び、調査報告書作成を開始した。整理調査には専従職員2名と臨時職員2名が配置され、限られた期間のため(1)実測図・表などを多用し客観的なデータの提示に努める、(2)考察編は掲載しない、(3)図・写真は必要なものだけにとどめ文章・図版ともにコンパクトにまとめるなどの編集方針に基づき作業を進め、平成10（1998）年9月末に調査報告書を計画通り刊行した。こうした経過を経て、翌11（1999）年6月に笹山遺跡出土品928点が国宝に指定された。県内初の国宝の誕生であり、縄文土器として国内初の指定という快挙となった（石原2018）。

考古資料においては、県指定の「伊達八幡館跡出土品」（281点、平成20年指定）、「久保寺南遺跡出土品」（309点、平成22年指定）、「野首遺跡出土品」（1,290点、平成2年指定）はもとより、市指定の「馬場上遺跡出土品」（一括、平成2年指定）、「伊達八幡館跡出土品」（県指定分を除く一括、平成11年指定）、「幅上遺跡出土品」（一括、平成12年指定）、「干満遺跡出土隆起線土器」（1点、平成24年指定）、「中島遺跡出土の縄文土器」（78点、平成27年指定）、「樽沢開田遺跡出土品」（98点、平成28年指定）、「田沢遺跡出土品」（152点、平成30年指定）についても、調査研究の大きな成果といえるだろう。

3. 調査研究と普及活動

(1) 展示事業と教育普及活動

旧博物館においては「妻有地方という地域社会を対象とし、郷土の特性である、雪と織物と信濃川を基本に特色ある博物館づくりを目指す」、「市民生活に密着した実物教育機関として、地域文化創造の中心となり、学術文化の振興に努める」、「各種博物館資料の収集、保存、調査、研究と展示を中心とした、教育普及活動の機能を有し、いつでも、誰でも、見たり、調べたりできる地域情報センターの役割を果たす」の3つの基本方針のもとに活動を行ってきた。開館以来、こ

れまでに開催された企画展・特別展は別表のとおりである（第8表～第9表）。新博物館の展示事業には企画展、特別展、特設展示のほか、まちの文化歴史コーナー-HAKKAKEの展示などがある。企画展、特別展では常設展で表現できない部分を補うとともに、地域の歴史や文化にとって重要なテーマを選んで年数回開催している。博物館にとって生命線であり、調査研究に裏打ちされたものでなければ「意味」がなく、「深み」のないものになることは改めて言うまでもない。教育普及事業には博物館講座、古文書入門講座、子ども博物館、縄文体験などがある。博物館講座は市民対象であるが、遠来の参加者も増えている。古文書入門講座は古文書解読の初心者を対象としたもので、市内の史料をテキストにして古文書に親しむとともに郷土の歴史を学ぶことを目的としている。子ども博物館は市内の小学4～6年生対象の体験教室である。企画展・特別展では、美術展の開催などが今後の課題と思われる。

(2) 古文書等歴史資料関係

文化財課文化財保護係では、古文書等歴史資料の調査・研究に継続的に取り組んでいる。平成24（2012）年度より十日町情報館が指定管理になったことに伴う組織改編により、古文書等歴史資料に関する事業が文化財課文化財保護係へと移管された。(1)山内景行家写真資料の整理・活用、(2)藤木元昭家文書（加賀屋文書）の調査・研究、(3)古文書等歴史資料の収集・整理の3つで構成され、これらは全て移管前からの継続事業である。

(1) 山内景行家写真資料の整理・活用

新潟県中越大地震での被災を機に、明治から100年の歴史を持つ「旧・山内写真館」の所蔵写真約48,000カットが十日町市に寄託された。これを受けて平成22（2010）年10月から、十日町市古文書整理ボランティアと十日町情報館が協働して、写真を活用できるようにするため、写真1点1点の内容情報（時代・場所・状況など）を調査し、写真資料カードに記録する作業に取り組んできた。平成24（2012）年3月までの第1期・第2期整理作業の結果、約4,000枚の資料カードが記入されている。平成24（2012）年度より文化財課が主管となり、令和5（2023）年度は第14期整理作業が行われている。

写真整理作業の成果を公開し、さらなる情報収集を図るため、写真展を開催しており、令和5（2023）年度で第15回目となる。また、旧・山内写真館資料48,000点のうち3,047点の写真画像が、国の取組みである「ジャパンスーチ」に掲載され、令和3（2021）年9月から誰でも気軽に検索・閲覧ができるようになった。

(2) 蕪木元昭家文書（加賀屋文書）の調査研究

新潟県中越え大震災で被災し、十日町市に寄託された62,000点の蕪木元昭家（縮間屋加賀屋）の歴史資料整理保存作業は、3年の歳月をかけて十日町情報館と市民ボランティアが共同して実施し、平成19（2007）年11月に歴史資料目録全8巻がまとめられ、研究活用の基盤が整えられた。そこで、資料群の全体的な内容解明と理解を深める中核的な人材育成を図り、あわせて資料研究と活用のさらなる素地づくりを進めるため、平成20（2008）年6月、加賀屋文書研究会が設立された。研究会は月1回のペースで開催され、令和2（2020）年11月に第130回研究会が開催されている。

(3) 古文書等歴史資料の整理

十日町市への寄託・寄贈資料のうち、古文書等歴史資料については、燻蒸後、情報館収蔵庫に保管し、整理作業を行ってきた。令和元（2019）年度には、古文書等歴史資料を十日町情報館から旧博物館に移動し、新博物館開館後は2階の研究室で整理作業を行っている。

(4) 国宝など実物資料の貸出

前稿（石原2023）でも触れたように、平成4（1992）年に重文・火焔型土器No1が「日本の古代展」（アメリカ ワシントンD.C.、アーサー・サックラー美術館）へ出品された。その後、平成10（1998）年には重文・火焔型土器No1が「縄文展」（フランス パリ、日本文化会館）に、平成13（2001）年には国宝・火焔型土器No1・6が「古代日本の聖なる美術展」（イギリス ロンドン、大英博物館）に、平成22（2010）年には国宝・火焔型土器No6が「日本の美 5000年」（トルコ イスタンブール、トプカプ宮殿博物館）に、平成30（2018）年には、国宝・火焔型土器No1が「縄

文ー日本における美の誕生ー」（フランス パリ、日本文化会館）に出品された。これら資料貸出は、博物館の重要な機能の一つであり、国宝の貸出実績については、次の文献をご参照願いたい（十日町市博物館編2020a）。

4. おわりに

縁あって十日町市博物館に就職し、間もなく40年が経とうとしている。笹山遺跡をはじめ幅上遺跡、樽沢開田遺跡など200を超える遺跡の発掘調査、整理調査、普及啓発に携わる機会を得た。笹山遺跡出土品の重要文化財指定や国宝指定に関わることができたのも幸いなことであった。

これまでの間に、阿部恭平、阿部敬、今井哲哉、小熊博史、小野昭、貝瀬香、笠井洋祐、川村知行、木村英祐、久保禎子、小林隆幸、小林達雄、小林徳、佐々木榮一、佐藤信之、佐藤雅一、眞田岳彦、菅沼亘、竹内俊道、高木公輔、高橋由美子、立木宏明、角田由美子、中村由克、新田康則、橋本博文、原田昌幸、林真子、平山育夫、廣野耕造、古澤安史、星野元一、松村実、宮尾亨、山田正毅の各氏をはじめ、多くの方々よりご教示をいただいた。また、故人となられたが、甘粕健、石澤真義、今福利恵、大島伊一、岡田稔、上村政基、小島俊彰、小林宏行、佐野良吉、島田靖久、須藤重夫、関雅之、高橋洋一、滝沢秀一、田村達夫、土肥孝、戸田哲也、富澤孝之、中澤幸男、波形卯二、樋熊清治、廣田永二、藤本強、丸山克己の各氏から種々ご教示をいただいた。文末ではあるが記して厚くお礼申し上げる。

なお、紙数に限りがあるため調査研究活動における市史編さん事業（昭和60年度～平成8年度）、歴史文化基本構想策定事業（平成27年度～29年度）、文化財保存活用地域計画策定事業（令和4年度～6年度）などの成果と地域博物館の関わりについては稿を改めて検討の機会をもちたい。また、文化財調査報告書（Ⅰ～Ⅶ）、文化財課年報（1～17号）、遺跡発掘調査報告書（1～75集）をはじめ引用・参考文献の多くを割愛した。お許しいただきたい。（2024年3月10日脱稿）

引用・参考文献

- 石原正敏 2010 「豪雪地帯に生まれた文化—火焔土器の世界—」 『知っておきたい新潟県の歴史』 新潟日報事業社
- 石原正敏 2015 「火焔型土器のクニ、から—菅山遺跡の土器、土製品や石器類」 『東北学』 05. はる書房
- 石原正敏 2018 「国宝「火焔型土器」の世界 菅山遺跡」 新泉社
- 石原正敏 2022 「ミュージアム・マネジメントの実践（1）—新十日町市博物館の取り組み—」 『十日町市博物館研究紀要』 第1号
- 石原正敏 2023 「ミュージアム・マネジメントの実践（2）—新十日町市博物館の取り組み—」 『十日町市博物館研究紀要』 第2号
- 佐野良吉 1982 「随想妻有郡—十日町地方の歴史と民俗—」 国書刊行会
- 佐野良吉 1990 「妻有郡の歴史散歩」 国書刊行会
- 竹内俊道 2002 「地域に根ざした博物館活動を目指して」 『博物館研究』 第37巻第6号 日本博物館協会
- 波形卯二 1994 「博物館案内 十日町市博物館」 『考古学ジャーナル』 372 ニュー・サイエンス社
- 十日町市博物館 編 1981 「十日町市博物館常設展示解説書1 雪」 十日町市博物館 編 1982 「十日町市博物館常設展示解説書2 信濃川」 十日町市博物館 編 1983 「十日町市博物館常設展示解説書3 織物生産工程」 十日町市博物館 編 1984 「十日町市博物館常設展示解説書4 織物歴史」 十日町市博物館 編 1987 「十日町市博物館常設展示解説書別冊 民家」 十日町市博物館 編 1987 「図録 妻有の女衆と織織り」 十日町市博物館 編 1988 『ガイドブック 十日町市の遺跡』 十日町市博物館 編 1992 「雪国十日町の暮らしと民具」 十日町市博物館 編 1994 「図説 越後アンギン」 十日町市博物館 編 1996a 「縄文の美—火焔土器の系譜—」 十日町市博物館 編 1996b 「火焔土器研究の新視点」 十日町市博物館 編 2000 「火焔型土器をめぐる諸問題—菅山遺跡の謎に迫る—」 十日町市博物館 編 2015 「十日町市博物館 年報 第1号」 十日町市博物館 編 2016 「十日町市博物館 年報 第2号」 十日町市博物館 編 2017 「十日町市博物館 年報 第3号」 十日町市博物館 編 2018 「十日町市博物館 年報 第4号」 十日町市博物館 編 2019 「十日町市博物館 年報 第5号」 十日町市博物館 編 2020a 「国宝 菅山遺跡出土品のすべて（改訂版）」 十日町市博物館 編 2020b 「十日町市博物館 要覧」 十日町市博物館 編 2020c 「十日町市博物館 年報 第6号」 十日町市博物館 編 2020d 「縄文の遺産—雪降る縄文と星降る縄文の競演—」 十日町市博物館 編 2021a 「常設展示案内ガイド」 十日町市博物館 編 2021b 「十日町市博物館 年報 第7号」 十日町市博物館 編 2021c 「岡本太郎が見て、置った縄文」 十日町市博物館 編 2022a 「十日町市博物館 年報 第8号」 十日町市博物館 編 2022b 「里山の石仏—松之山の祈りと信仰—」 十日町市博物館 編 2022c 「縄文時代の地まわりを探る」 十日町市博物館 編 2023a 「十日町市博物館 年報 第9号」 十日町市博物館 編 2023b 「笑う縄文人—縄文人の喜怒哀楽—」 十日町市博物館・十日町市博物館友の会 編 1999 「十日町市博物館 開館・博物館友の会設立20周年記念誌 国宝のまち モノが語る博物館」 十日町市博物館・十日町市博物館友の会 編 2009 「十日町市博物館 開館・博物館友の会設立30周年記念誌 モノが語る博物館」 十日町市博物館・十日町市博物館友の会 編 1997 「妻有のいしふみ」 十日町市博物館友の会 編 2014 「三十五周年記念誌 古文書に学ぶ」 十日町市博物館友の会松代のいしふみ編集委員会 編 2016 「松代のいしふみ」 十日町市博物館友の会 編 2016 「ささやまの耳—菅山遺跡第8〜10次調査成果概要—」 十日町市教育委員会文化財課 編 2018 「十日町市歴史文化基本構想」 新潟県十日町市 編 2022 「田沢・壬道跡保存活用計画」 新潟県十日町市 編 2002 「雪文化三館連携10周年記念企画 北越雪国と魚沼の風土」 十日町市博物館友の会

第1表 文化財課の歩み(1) (平成2年度～平成11年度)

年度	予算・人員・出来事など					
平成2年度 (1990)	当初予算額	24,460千円	補正額	3,820千円	決算額	28,068千円
	不用額	212千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	星野元一、齊木仁、阿部恭平、竹内俊道、樋口克子、石原正敏、高橋由美子、河合順之(8月～)。(補助員) 山田敏枝・上野洋子・中沢仁・宇都宮浩美				
	出来事	文化財課の新設(4.1)、幅上遺跡の発掘調査、大井田城跡に説明板設置				
平成3年度 (1991)	当初予算額	32,823千円	補正額	6,860千円	決算額	39,456千円
	不用額	227千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	星野元一、齊木仁、阿部恭平、竹内俊道、樋口克子、石原正敏、高橋由美子、河合順之(～5月)。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子・遠田芳子・吉沢順子				
	出来事	十日町の積雪期用具の重文指定(4.19)、リゾート関連遺跡調査の委託契約締結(～平成8年度)、神宮寺に説明板設置				
平成4年度 (1992)	当初予算額	37,778千円	補正額	2,681千円	決算額	40,224千円
	不用額	256千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	波形明二、齊木仁、阿部恭平、竹内俊道、樋口克子、石原正敏、高橋由美子、菅沼亘、星野奈美。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子・遠田芳子・吉沢順子				
	出来事	重要文化財・火焔型土器のワシントン・アーサー・サックラー美術館への出陣、大井久保遺跡・ぼんのう遺跡の発掘調査、鉢の石仏に説明板設置				
平成5年度 (1993)	当初予算額	27,255千円	補正額	14,390千円	決算額	41,389千円
	不用額	256千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	波形明二、熊木剛、阿部恭平、竹内俊道、樋口克子、石原正敏、高橋由美子、菅沼亘、星野奈美。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子・吉沢順子				
	出来事	大黒沢正平在銘梵字碑と姿籠神社の大ケヤキに説明板設置				
平成6年度 (1994)	当初予算額	24,206千円	補正額	1,053千円	決算額	25,156千円
	不用額	103千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	波形明二、熊木剛、阿部恭平、竹内俊道、樋口克子、石原正敏、高橋由美子、菅沼亘、星野奈美。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子				
	出来事	大沢遺跡・城之古遺跡の発掘調査、高龍神社社署に説明板設置、博物館開館・友の会設立15周年				
平成7年度 (1995)	当初予算額	35,197千円	補正額	△4,746千円	決算額	29,911千円
	不用額	539千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	波形明二、熊木剛、阿部恭平、庭山敏子、竹内俊道、石原正敏、菅沼亘、太田喜重、星野奈美。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子				
	出来事	安養寺松尾神社の大スギ・円通庵の三木スギに説明板設置				
平成8年度 (1996)	当初予算額	90,334千円	補正額	△19,360千円	決算額	67,104千円
	不用額	3,870千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	波形明二、熊木剛、阿部恭平、庭山敏子、竹内俊道、角山誠一、石原正敏、菅沼亘、太田喜重。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子。(補助員) 吉栗勝彦				
	出来事	野首遺跡・島A遺跡・なんぜん堂場遺跡の発掘調査、笹山遺跡に説明板設置				
平成9年度 (1997)	当初予算額	75,599千円	補正額	4,276千円	決算額	77,673千円
	不用額	2,202千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	風間栄光、阿部恭平、高橋アキ、庭山敏子、竹内俊道、角山誠一、石原正敏、菅沼亘、太田喜重。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子。(補助員) 吉栗勝彦				
	出来事	寿久保遺跡・つじ原C遺跡の発掘調査、観泉院山門に説明板設置				
平成10年度 (1998)	当初予算額	23,004千円	補正額	7,786千円	決算額	30,407千円
	不用額	383千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	風間栄光、丸山克巳、阿部恭平、高橋トシ子、高橋アキ、角山誠一、石原正敏、菅沼亘、太田喜重、村山由美子。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子。(補助員) 吉栗勝彦				
	出来事	笹山遺跡発掘調査報告書の刊行、菅泉寺山門に説明板設置、重要文化財・火焔型土器のバリエーション展への出陣				
平成11年度 (1999)	当初予算額	38,400千円	補正額	△1,490千円	決算額	35,397千円
	不用額	1,513千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	山田正敏、阿部恭平、高橋トシ子、高橋アキ、村山由美子、石原正敏、菅沼亘、太田喜重、村山由美子。(臨時職員) 山田敏枝・上野洋子。(補助員) 吉栗勝彦				
	出来事	笹山遺跡出土品の国史指定(6.7)、谷内A遺跡・中新田A遺跡などの発掘調査、羽川城跡に説明板設置、博物館開館・友の会設立20周年				

第2表 文化財課の歩み(2) (平成12年度～平成21年度)

年度	予算・人員・出来事など					
平成12年度 (2000)	当初予算額	30,928千円	補正額	△9,296千円	決算額	20,680千円
	不用額	952千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	山田正敏、阿部恭平、高橋アキ、竹内俊道、村竹修、石原正敏、菅沼亘、太田喜重、岩田恵美子。(臨時)山田敏枝・上野洋子。(補助員)根津恵・宮内信雄				
	出来事	道端A遺跡・道下南遺跡の発掘調査、入山のカスミザクラに説明板設置				
平成13年度 (2001)	当初予算額	19,233千円	補正額	1千円	決算額	18,880千円
	不用額	354千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	山田正敏、竹内俊道、高橋アキ、村竹修、菅沼亘、太田喜重、岩田恵美子、林真子。(編託)阿部恭平。(臨時)山田敏枝・上野洋子。(補助員)根津恵				
	出来事	国宝・火焔型土器の大英博物館への出陣、狐城跡の発掘調査				
平成14年度 (2002)	当初予算額	28,122千円	補正額	△3,366千円	決算額	24,316千円
	不用額	440千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	上村松雄、竹内俊道、菅沼亘、太田喜重、岩田恵美子、林真子、富井寛人。(編託)阿部恭平。(臨時)山田敏枝・上野洋子。(補助員)高橋杜子				
	出来事	水沢館跡の発掘調査、『馬場上遺跡発掘調査報告書』の刊行				
平成15年度 (2003)	当初予算額	32,640千円	補正額	△8,100千円	決算額	23,819千円
	不用額	721千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	上村松雄、竹内俊道、石原正敏、菅沼亘、岩田恵美子、林真子、富井寛人。(編託)阿部恭平。(臨時)山田敏枝・上野洋子				
	出来事	江道A遺跡の発掘調査				
平成16年度 (2004)	当初予算額	30,625千円	補正額	△2,189千円	決算額	24,188千円
	不用額	4,248千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	小林宏行、竹内俊道、石原正敏、菅沼亘、富井寛人、阿部美紀。(編託)阿部恭平。(臨時)山田敏枝。(補助員)上野洋子・宮内信雄				
	出来事	江道B・C遺跡の発掘調査、『伊達八幡館跡発掘調査報告書』の刊行、博物館開館・友の会設立25周年				
平成17年度 (2005)	当初予算額	46,948千円	補正額	2,537千円	決算額	49,485千円
	不用額	●千円	繰越額	6,490千円	備考	
	職員	小林宏行、竹内俊道、水落辰美、石原正敏、菅沼亘、笠井洋祐、大見好行、阿部美紀。(編託)阿部恭平。(臨時)山田敏枝。(補助員)上野洋子・宮内信雄・板橋恭子				
	出来事	市町村合併(4.1)。星名家住宅保存修理事業、上ノ山開墾地遺跡の発掘調査				
平成18年度 (1996)	当初予算額	48,186千円	補正額	△8,858千円	決算額	38,347千円
	不用額	981千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	小林宏行、竹内俊道、水落辰美、石原正敏、菅沼亘、福原真由美、笠井洋祐、大見好行。(編託)阿部恭平。(臨時)山田敏枝。(補助員)上野洋子・宮内信雄				
	出来事	市指定文化財の見直し答申、『幅上遺跡発掘調査報告書』の刊行				
平成19年度 (2007)	当初予算額	187,819千円	補正額	19,200千円	決算額	122,943千円
	不用額	1,850千円	繰越額	82,300千円	備考	
	職員	小林宏行、竹内俊道、水落辰美、石原正敏、菅沼亘、笠井洋祐、大見好行、吉澤真由美。(編託)宮内信雄。(臨時)斎藤浩俊。(補助員)上野洋子・角山誠一				
	出来事	松代郷土資料館移転改修事業、伊達八幡館跡出土品の墓文化財指定				
平成20年度 (2008)	当初予算額	209,309千円	補正額	6,501千円	決算額	284,222千円
	不用額	3,092千円	繰越額	10,796千円	備考	
	職員	竹内俊道、長津政勝、水落辰美、石原正敏、菅沼亘、笠井洋祐、大見好行、吉澤真由美。(編託)宮内信雄。(補助員)上野洋子・角山誠一				
	出来事	松代郷土資料館移転改修事業完了、上屋敷遺跡の発掘調査				
平成21年度 (2009)	当初予算額	73,197千円	補正額	10,428千円	決算額	90,759千円
	不用額	3,663千円	繰越額	0千円	備考	
	職員	竹内俊道、長津政勝、水落辰美、石原正敏、菅沼亘、笠井洋祐、吉澤真由美、小市知子。(編託)宮内信雄。(補助員)上野洋子・角山誠一・富澤孝之				
	出来事	梅沢開田遺跡の発掘調査、久保寺南遺跡出土品の墓文化財指定、博物館開館・友の会設立30周年				

第3表 文化財課の歩み(3) (平成22年度～平成29年度)

年度	予算・人員・出来事など					
平成22年度 (2010)	当初予算額	55,821千円	補正額	22,688千円	決算額	62,909千円
	不用額	1,104千円	繰越額	14,460千円	備考	
	職員	平野勝、長津政勝、水落賢美、石原正敏、菅沼互、太田喜重、笠井洋祐、小田知子、(嘱託)宮内信雄、(補助員)上野洋子・角山誠一・斎藤浩俊・富澤孝之				
	出来事	清津宮幕遺跡の発掘調査、国宝・大船型土器のイスタンブール・トプカプ宮殿博物館への出展、重要文化財・足名家住千の保存修理事業完了				
平成23年度 (2011)	当初予算額	85,709千円	補正額	21,522千円	決算額	94,261千円
	不用額	8,220千円	繰越額	19,210千円	備考	
	職員	平野勝、水落賢美、石原正敏、矢口ヨネ子、菅沼互、太田喜重、笠井洋祐、阿部敬、(嘱託)宮内信雄、(補助員)上野洋子・角山誠一・斎藤浩俊・富澤孝之・阿部美記子・片島智美・滝井美保子				
	出来事	国宝出土地・登山遺跡の学術調査事業が始まる、自然災害による指定文化財の被害が相次ぐ				
平成24年度 (2012)	当初予算額	113,039千円	補正額	43,120千円	決算額	128,870千円
	不用額	13,899千円	繰越額	39,950千円	備考	
	職員	平野勝、水落賢美、石原正敏、矢口ヨネ子、菅沼互、太田喜重、笠井洋祐、阿部敬、(嘱託)宮内信雄、(補助員)上野洋子・角山誠一・斎藤浩俊・富澤孝之・阿部美記子・滝井美保子				
	出来事	国宝出土地・登山遺跡の学術調査、神宮寺茅屋根災害復旧工事				
平成25年度 (2013)	当初予算額	117,021千円	補正額	20,212千円	決算額	120,215千円
	不用額	8,137千円	繰越額	43,130千円	備考	
	職員	佐野芳隆、佐野誠市、石原正敏、矢口ヨネ子、菅沼互、太田喜重、大滝孝子、笠井洋祐、阿部敬、田村典子、(嘱託)宮内信雄、(臨時)阿部智美・大淵麻美・角山誠一・田村薫・滝井美保子、(補助員)阿部美記子・上野洋子・佐藤美千代・富澤孝之・樋口信一・高橋真弓・水落よね子・富井香織				
	出来事	国宝出土地・登山遺跡の学術調査、神宮寺茅屋根災害復旧工事、『歴史資料目録11』刊行				
平成26年度 (2014)	当初予算額	74,928千円	補正額	45,148千円	決算額	107,440千円
	不用額	13,666千円	繰越額	42,100千円	備考	
	職員	佐野芳隆、佐野誠市、石原正敏、矢口ヨネ子、菅沼互、太田喜重、大滝孝子、笠井洋祐、阿部敬、田村典子、(嘱託)宮内信雄、(臨時)中山未沙樹・阿部智美・阿部美記子・角山誠一・田村薫・引間佳子・滝井美保子、(補助員)阿部由美子・上野洋子・佐藤美千代・高橋真弓・富澤孝之・樋口信一・種原恵美子・真霜達夫・水落よね子				
	出来事	中島遺跡出土品の市文化財指定、『歴史資料目録12』刊行、博物館館友・友の会設立35周年				
平成27年度 (2015)	当初予算額	95,185千円	補正額	56,969千円	決算額	124,135千円
	不用額	4,946千円	繰越額	23,073千円	備考	
	職員	佐野誠市、石原正敏、矢口ヨネ子、菅沼互、村山歩、南雲勝巳、大滝孝子、笠井洋祐、阿部敬、田村典子、(嘱託)宮内信雄、(臨時)中山未沙樹・角山誠一・阿部美記子(～6/30)・阿部智美(7/1～)・瀧沢亜矢羽・近春奈(7/1～9/26)・田村薫・引間佳子、(補助員)上野洋子・富澤孝之・樋口信一・水落よね子				
	出来事	横沢開田遺跡出土品の市文化財指定、十日町市歴史文化基本構想策定に着手、国宝・大船型土器の大型写真看板製作、新博物館基本計画検討委員会開催				
平成28年度 (2016)	当初予算額	89,759千円	補正額	△9,124千円	決算額	59,795千円
	不用額	9,454千円	繰越額	11,386千円	備考	
	職員	佐野誠市、石原正敏、菅沼互、村山歩、笠井洋祐、南雲勝巳、大滝孝子、阿部敬、黒田朋美、田村典子、(嘱託)佐野芳隆・宮内信雄、(臨時)中山未沙樹・角山誠一・瀧沢亜矢羽・田村薫・引間佳子・高橋真弓、(補助員)上野洋子・富澤孝之・樋口信一・水落よね子				
	出来事	国宝・登山遺跡深鉢形土器の3次元計測、十日町市歴史文化基本構想策定協議会を開催、新博物館の基本設計・実施設計				
平成29年度 (2017)	当初予算額	75,493千円	補正額	1,162千円	決算額	65,155千円
	不用額	2,900千円	繰越額	8,600千円	備考	
	職員	佐野誠市、石原正敏、山田和志、菅沼互、村山歩、笠井洋祐、大滝孝子、阿部敬、黒田朋美、若月辰則、田村典子、(嘱託)佐野芳隆・田村薫、(臨時)引間佳子・春川奈嘉子・宮沢早記、(補助員)上野洋子・富澤孝之・樋口信一・角山誠一・水落よね子				
	出来事	田沢遺跡出土品の市文化財指定、十日町市歴史文化基本構想策定協議会を開催、『十日町市歴史文化基本構想』刊行、新博物館建設工事開始、国宝・大船型土器の高橋真弓レプリカ製作				

第4表 文化財課の歩み(4) (平成30年度～令和5年度)

年度	予算・人員・出来事など							
平成30年度 (2018)	当初予算額	33,048千円	補正額	8,000千円	決算額	38,153千円		
	不用額	1,797千円	繰越額	1,098千円	備考			
	職員	佐野誠市、石原正敏、菅沼亘、村山歩、笠井洋祐、大滝孝子、阿部敬、黒田朋美、若月武則、田村典子。(嘱託)佐野芳隆・田村薫。(臨時)引間佳子・春川奈嘉子・宮沢早記・生越友子。(補助員)上野洋子・富澤孝之・樋口信一・角山誠一・水落よね子						
	出来事	新博物館建設工事、松平神社本殿屋根茅葺替工事、国宝・火燗型土器のハリ日本文化会館への出庫						
令和元年度 (2019)	当初予算額	32,077千円	補正額	27,390千円	決算額	52,138千円		
	不用額	7,329千円	繰越額	0千円	備考			
	職員	佐野誠市、石原正敏、富田晃、菅沼亘、村山歩、大滝孝子、高橋由美子、笠井洋祐、阿部敬、黒田朋美、若月武則、田村典子。(嘱託)田村薫。(臨時)引間佳子・春川奈嘉子・宮沢早記・(補助員)上野洋子・富澤孝之・樋口信一・角山誠一・水落よね子						
	出来事	生きた歴史体験プログラム事業に着手、本ノ木・田沢遺跡群が国史跡指定、松平神社本殿屋根茅葺替工事完了、博物館開館・友の会設立40周年、国史指定20周年記念シンポジウム開催、新博物館建設工事完了、旧博物館休館および新博物館へ事務室転移、国宝および重要資料の移動開始、野首遺跡出土品の県文化財指定						
令和2年度 (2020)	当初予算額	23,464千円	補正額	△670千円	決算額	20,754千円		
	不用額	2,040千円	繰越額	0千円	備考			
	職員	佐野誠市、石原正敏、富田晃、菅沼亘、村山歩(～7/12)、高橋由美子、笠井洋祐、阿部敬、興野裕貴子、黒田朋美、若月武則、田村典子。(会計年度任用)田村薫、引間佳子・春川奈嘉子・山田まり・宮沢早記。(補助員)上野洋子・富澤孝之・樋口信一・角山誠一・水落よね子						
	出来事	田沢・壬道跡保存活用計画策定に着手、『野首遺跡発掘調査報告書Ⅲ』刊行、新博物館オープン(6.1)、国宝・火燗型土器を含む特殊切手「国宝シリーズ第1集(考古資料)」販売、生きた歴史体験プログラム事業を実施						
令和3年度 (2021)	当初予算額	19,563千円	補正額	5,288千円	決算額	24,075千円		
	不用額	776千円	繰越額	0千円	備考			
	職員	石原正敏、菅沼亘、富田晃、高橋由美子、相崎文幸、笠井洋祐、阿部敬、興野裕貴子、黒田朋美、本柳美紀、田村典子。(会計年度任用)田村薫、春川奈嘉子、引間佳子(～6/30)・山田まり(7/1～)・宮沢早記(7/1～)、(補助員)上野洋子・水落よね子						
	出来事	田沢・壬道跡保存活用計画策定委員会開催、『田沢・壬道跡保存活用計画』刊行、縄文体験鑑光プログラム事業(生きた歴史体験プログラム事業名を変更)を実施、博物館収蔵資料デジタルアーカイブ化事業などを実施						
令和4年度 (2022)	当初予算額	63,503千円	補正額	△3,193千円	決算額	56,347千円		
	不用額	2,345千円	繰越額	2,000千円	備考			
	職員	石原正敏、菅沼亘、富田晃、高橋由美子、相崎文幸、笠井洋祐、阿部敬、興野裕貴子、本柳美紀、田村典子。(会計年度任用)田村薫・春川奈嘉子・山田まり・池田好恵・村山亜樹。(補助員)上野洋子・水落よね子						
	出来事	縄文体験鑑光プログラム事業を実施、十日町市文化財保存活用地域計画策定に着手、漆塗色加工所ろうけつ染め見本製データベース公開開始、博物館収蔵資料デジタルアーカイブ化事業などを実施						
令和5年度 (2023)	当初予算額	18,508千円	補正額	●千円	決算額	●千円		
	不用額	●千円	繰越額	0千円	備考			
	職員	菅沼亘、笠井洋祐、村山歩、高橋由美子、相崎文幸、阿部敬、石原正敏、富澤孝子、本柳美紀、渡野結希。(会計年度任用)田村薫・春川奈嘉子・山田まり・池田好恵・村山亜樹。(補助員)上野洋子・水落よね子						
	出来事	縄文体験鑑光プログラム事業を実施、十日町市文化財保存活用地域計画策定協議会を開催、博物館収蔵資料デジタルアーカイブ化事業などを実施						

※出来事には博物館事業を一部含む

第5表 発掘調査一覧(1) (旧十日町市・平成17年～ 新十日町市)

調査年度	発掘	試掘	遺跡名
昭和34(1959)	1		小坂遺跡(1次)
昭和35(1960)	1		小坂遺跡(2次)
昭和45(1970)	1		牛ヶ首遺跡
昭和48(1973)	2		城之古遺跡(1次、県教委)、川治百塚第6号塚(県教委)
昭和49(1974)	2	9	馬場上遺跡(1・2次)
昭和50(1975)	3	20	馬場上遺跡(3・4次)、北原八幡遺跡(県教委)
昭和51(1976)	1		つつじ原B遺跡(1次)
昭和55(1980)	3		坪野館跡、馬場上遺跡(5次)、笹山遺跡(1次)
昭和56(1981)	2		池之端遺跡、笹山遺跡(2次)
昭和57(1982)	7		笹山遺跡(3～5次)、笹山塚群、カタガリ遺跡、カタガリ城跡、小坂遺跡(3次)
昭和58(1983)	4	2	赤羽根遺跡(1・2次)、馬場館跡(1次)、馬場神社遺跡
昭和59(1984)	6	4	馬場上遺跡(6次)、江崎遺跡、笹山遺跡(6次)、馬場館跡(2次)、赤羽根遺跡(3次)、柳木田遺跡(1次)
昭和60(1985)	6	3	柳木田遺跡(2次)、川治上原A遺跡、川治上原B遺跡、笹山遺跡(7次)、水穴遺跡(1次)、南谷内館跡(1次)
昭和61(1986)	2	2	栗ノ木田遺跡、南谷内館跡(2次)
昭和62(1987)	3	5	伊達八幡館跡、寺大門北遺跡、寺大門南遺跡
昭和63(1988)	4	10	河原田遺跡(1次)、社畑遺跡、格原遺跡、杵ノ木清水B遺跡
平成元(1989)	8	17	杵ノ木清水A遺跡、つつじ原A遺跡、つつじ原B遺跡(2次)、大清水遺跡、中段遺跡、天池A遺跡、天池B遺跡、野首遺跡(1次)
平成2(1990)	4	11	鯉坂ニツ塚、狐塚遺跡、水沢館跡(1次)
平成3(1991)	6	20	横割遺跡、大新田遺跡、牛塚遺跡、椿池遺跡、河原田遺跡(2次)、牧脇遺跡
平成4(1992)	7	12	道下遺跡、宮ノ上A遺跡、宮ノ上B遺跡、水穴遺跡(2次)、延命寺遺跡、大井久保遺跡、ぼんのう遺跡(1次)
平成5(1993)	7	9	高島南原A遺跡、高島南原B遺跡、カウカ平A遺跡、カウカ平B遺跡、ぼんのう遺跡(2次)、珠川A遺跡(1次)、珠川B遺跡
平成6(1994)	6	10	珠川A遺跡(2次)、大沢遺跡、上塚原B遺跡、中道遺跡、思川遺跡、城之古遺跡(2次)
平成7(1995)	8	7	城之古遺跡(3次)、上梨子A遺跡、上梨子B遺跡、ぼんのう南遺跡、上組A遺跡、上組B遺跡、戸原遺跡(1次)、野首遺跡(2次)
平成8(1996)	12	9	野首遺跡(3次)、戸原遺跡(2次)、岡山遺跡、アミダ原敷A遺跡、谷内田遺跡、島A遺跡、島B遺跡、白井田A遺跡、白井田B遺跡、なんぜん堂場遺跡(1次)、やせ舟(1・2次)
平成9(1997)	10	2	やせ舟遺跡(3次)、春山遺跡、寿久保遺跡、十二神A遺跡、十二神B遺跡、中曾根A遺跡、原田A遺跡、原田B遺跡、つつじ原C遺跡、なんぜん堂場遺跡(2次)
平成10(1998)	3	11	谷地A遺跡(1次)、中新田B遺跡(1次)、廿日城東遺跡(1次)
平成11(1999)	6	4	谷地A遺跡(2次)、中新田A遺跡、中新田B遺跡(2次)、廿日城東遺跡(2次)、下梨子遺跡(1次)、泥木遺跡
平成12(2000)	5	6	道端A遺跡、道端B遺跡、道下南遺跡、馬場上遺跡(7次)、上塚原A遺跡
平成13(2001)	3	4	狐城跡(1次)、水沢館跡(2次)、栴山遺跡
平成14(2002)	4	10	水沢館跡(3次)、狐城跡(2次)、宮栗北遺跡、馬場上遺跡(8次)
平成15(2003)	4	3	江道A遺跡、大道下遺跡、狐城跡(3次)、中林I遺跡
平成16(2004)	3	5	江道B遺跡、江道C遺跡、下梨子遺跡(2次)
平成17(2005)	4	10	会所前A遺跡(2次)、上ノ山開墾地遺跡(1次)、上ノ山遺跡
平成18(2006)	2	8	上ノ山開墾地遺跡(2次)、尾崎館跡
平成19(2007)	4	14	梶花遺跡、貝野久保遺跡、真萩田遺跡
平成20(2008)	6	16	貝野大道下遺跡、真萩田遺跡(2次)、上屋敷遺跡(1次)
平成21(2009)	9	14	梅沢開田遺跡、貝野沖遺跡、上屋敷遺跡(2次)、溝遺跡、久保寺遺跡、道下南遺跡、田沢中道遺跡、坪野館跡、田沢遺跡(2次)
平成22(2010)	5	17	清津宮峯遺跡、貝野沢田遺跡(1次)、干溝東遺跡(1次)、楯詰居村遺跡、田沢遺跡(3次)
平成23(2011)	7	11	干溝東遺跡(2次)、小原遺跡、白羽毛遺跡、下原田A遺跡、下原田B遺跡、貝野沢田遺跡(2次)、笹山遺跡(8次)、田沢遺跡(4次)
平成24(2012)	6	15	小原遺跡(2次)、会所前A遺跡(3次)、おざか清水遺跡(2次)、貝野沢田遺跡(3次)、楯詰居村遺跡、笹山遺跡(9次)、田沢遺跡(5次)
平成25(2013)	6	14	おざか清水遺跡(3次)、楯詰居村遺跡(2次)、天尾山城跡、貝野沢田遺跡(4次)、原遺跡(1次)、笹山遺跡(10次)、田沢遺跡(6次)

第6表 発掘調査一覧(2) (新十日町市)

調査年度	発掘	試掘	遺跡名
平成26(2014)	5	14	橋詰居村遺跡(3次)、貝野沢田遺跡(5次)、原遺跡(2次)、貝野沖遺跡(2次)、田沢遺跡(7次)
平成27(2015)	5	13	貝野沖遺跡(3次)、一里塚遺跡、山谷城跡、馬場上遺跡、田沢遺跡(8次)
平成28(2016)	1	15	馬場上遺跡
平成29(2017)	1	15	馬場上遺跡
平成30(2018)	1	11	林中遺跡
令和元(2019)	4	15	林中遺跡、林中西遺跡、苧島小原遺跡、楢形遺跡(1次)
令和2(2020)		7	蟹沢遺跡
令和3(2021)	1	3	楢形遺跡(2次)、姿上山遺跡
令和4(2022)	2	7	木落大原遺跡、木落大原南遺跡、山谷諏訪越遺跡
令和5(2022)		15	塩辛遺跡、馬場上遺跡、下原田A遺跡、木落大原北遺跡、楢形遺跡(3次)
小計	213	419	

第7表 発掘調査一覧(3) (上段:旧中里村、下段:旧松代町)

調査年度	発掘	試掘	遺跡名
昭和34(1959)	1		泉竜寺遺跡
昭和40(1965)	1		中林遺跡(東北大学)
昭和43(1968)	1		田沢遺跡(東北大学)
昭和48(1973)	1		森上遺跡
昭和54(1979)	1		壬遺跡(1次、國學院大学)
昭和55(1980)	1		壬遺跡(2次、國學院大学)
昭和56(1981)	1		壬遺跡(3次、國學院大学)
昭和57(1982)	1		壬遺跡(4次、國學院大学)
昭和60(1985)	1	1	廣之巣遺跡
昭和61(1986)	1		壬遺跡(5次、國學院大学)
昭和63(1988)	1		布場遺跡(1次)
平成元(1989)	1		通り山遺跡
平成2(1990)	1	2	一里塚遺跡
平成3(1991)	2	1	壬遺跡(6次)、干溝遺跡
平成4(1992)	2	1	小丸山遺跡、おざか清水遺跡
平成5(1993)	1		御居敷遺跡
平成8(1996)		2	桂遺跡
平成9(1997)		7	
平成10(1998)		2	
平成11(1999)	1	2	久保寺南遺跡
平成12(2000)	1	4	家ノ上遺跡
平成13(2001)	4	7	貝野遺跡、中島遺跡(1次)、内後遺跡(1次)、布場遺跡(2次)
平成14(2002)	8	5	内後遺跡(2次)、中島遺跡(2次)、中田B遺跡、中田D遺跡、堂ノ上遺跡(1次)、宮中家ノ中遺跡、原居敷遺跡、会所前遺跡
平成15(2003)	3	6	上橋遺跡、内後遺跡(3次)、堂ノ上遺跡(2次)
平成16(2004)	2	4	会所前A遺跡(1次)、干溝南遺跡
小計	37	44	

調査年度	発掘	試掘	遺跡名
平成9(1997)	1		向原Ⅱ遺跡(確認)
平成10(1998)	1		向原Ⅱ遺跡(1次)
平成11(1999)	1		向原Ⅱ遺跡(2次)
小計	3		

第8表 これまでに開催された企画展・特別展(移動展・巡回展を含む)(1)

年 度	特別展・企画展等の名称(期間)
昭和54 (1979)	「越後のちぢみ展」(4/27～5/20)、「木の文化展」(8/4～31)、「星裏一遺作展」(10/12～14)、「菊と刀展」(10/27～11/4)、「雪の民具展」(2/7～29)
昭和55 (1980)	「明石ちぢみ展」(5/1～6/8)、「新潟県の画家たち展」(8/9～17)、「庚申さまと庚申信仰展」(10/26～11/9)、「雪と雪の民具展」(2/13～22)
昭和56 (1981)	「越後ちぢみと明石ちぢみ展」(5/3～6/7)、「日本の郷土玩具展」(11/1～8)
昭和57 (1982)	「妻有の画人たち展」(8/25～29)、「妻有の文化財展」(10/30～11/7)
昭和58 (1983)	「妻有の衣食住展」(8/10～31)、「近代日本洋画の巨匠たち展」(11/1～6)
昭和59 (1984)	「日本画、洋画、巨匠たちの世界展」(9/1～5)、「明治、大正、昭和100枚の写真展」(10/20～11/4)、「目で見る十日町の歴史展」(11/11・中条公民館新館分館、2/8～17・下条公民館)
昭和60 (1985)	「広重・東海道五十三次展」(9/1～5)、「全日写連写真展」(10/3～6)、「戦中・戦後のくらし展」(11/22～12/8)、「雪の造形写真展」(11/3・中条公民館大井田分館)
昭和61 (1986)	「重文・越後縮み資料展」(4/10～7/20)、「世界の大昆虫展」(8/26～9/7)、「女性をえがく展」(10/8～12)、「明治・大正・昭和写真展」(11/2～3・水沢公民館)
昭和62 (1987)	「大正浪漫明石ちぢみの世界展」(4/9～5/17)、「信濃川の魚と漁法展」(8/23～27)、「妻有の画人たち展Ⅱ」(10/17～25)、「雪の中のくらし写真展」(2/12～14)、「小坂道跡と縄文人のくらし」(10/25・吉田公民館総島分館)
昭和63 (1988)	「冬の生活用具展」(4/30～5/29)、「デザイン亀倉雄策展」(8/21～28)、「市史編さん資料展」(10/8～16)、「越後縮み名品展」(2/10～12)、「昔のくらし写真展」(10/23・吉田公民館名ヶ山分館)、「水沢地域の城と道跡展」(11/3～6・水沢公民館)
平成元 (1989)	博物館開館・友の会設立10周年記念「池田満寿夫展」(10/21～29)、「妻有の百三十三番写真展」(11/5～12・水沢公民館)
平成2 (1990)	「妻有の職人と道具展」(4/28～5/20)、「近世妻有俳諧と系譜展」(8/11～9/2)、「雪の造形と文様展」(10/13～21)、「稲上道跡速報展」(11/3・吉田公民館総島分館)
平成3 (1991)	「十日町の積雪期用具展」(8/11～9/1、2/8～16)、「大新田道跡の調査記録」(10/27・総島小学校)
平成4 (1992)	「積雪期用具展」(4/25～5/31)、「竹久夢二展」(10/10～26)
平成5 (1993)	「星裏一とスノリア展」(6/5～20)、「浮世絵名品展-中右コレクション」(10/9～25)、「カウカ平A・B道跡・高島南原A・B道跡調査記録」(10/31・総島小学校)
平成6 (1994)	開館・友の会設立15周年/市政施行40周年記念「極方志功展」(10/8～23)、「高橋喜平・雪の造形写真展」(2/16～20)、「中道・思川道跡の調査」(10/30・真田小学校他)
平成7 (1995)	「手工芸の美-編・組・刺繍三人展」(6/17～7/2)、「富士の写真家・岡田紅陽生誕100周年記念展」(10/7～22)、「上梨子A・B道跡調査」(11/5・西小学校)
平成8 (1996)	「発掘調査速報展-平成3～7年度分」(6/15～30)、「縄文の美-火焙土器の系譜」(9/28～10/27)
平成9 (1997)	「十日町の文化財展」(5/17～6/8)、「中条地区の道跡調査」(10/25～26・中条小学校)
平成10 (1998)	「インド先住民族アート展」(ミティラー美術館共催・4/17～5/5)、「妻有のいしぶみ展」(10/6～11/15)、「第50回雪まつり記念「高橋喜平写真展-雪花譜」(2/19～21)
平成11 (1999)	登山道跡出土品国宝指定記念「縄文の美パートⅡ-火焙型土器の世界」(8/21～10/10)
平成12 (2000)	「縄文の祭祀」(9/22～10/22)、「くらしの美 思い出の品々」(2/16～18)、「登山道跡とその出土品展」(6/3～4)
平成13 (2001)	「民具からみた縄文の用具Ⅰ-編・織用具と装身具Ⅰ」(6/2～24)、「民具からみた縄文の用具Ⅱ-食料調達と食事の用具Ⅰ」(9/22～10/14)、「博物館収蔵資料展-越後縮を中心としてⅠ」(2/15～17)、「野首道跡展」(11/4・下条公民館新田分館)
平成14 (2002)	「現代アートに挑戦するインド先住民族アートの世界展」(ミティラー美術館共催・4/26～5/19)、「きものでつづる十日町の歩み」(6/15～30)、「雪文化三館提携10周年記念「北越雪語と魚沼の風土」(10/26～11/10)、「博物館収蔵資料展-十日町のきものからⅠ」(2/14～16)
平成15 (2003)	全国大井田氏サミット10周年記念「大井田健一 父祖の地を推く」(5/17～6/8)、「大地の芸術祭協賛「大地の息吹き-十日町の火焙型土器Ⅰ」(7/20～9/7)、「きもの歴史館開館記念「越後縮の文様と美」(10/4～28)、「収蔵資料展-暮らしを彩る着物と品々Ⅱ」(2/20～22)
平成16 (2004)	国宝指定5周年記念「国宝と地域の宝物-十日町の火焙型土器Ⅱ」(6/1～30)、「博物館と友の会の四半世紀」(7/10～25)、「市制施行50周年記念「十日町市50年の歩みと暮らし」(9/29～11/3)、「火焙道博物館連携プロジェクト「子ども縄文研究展」(11/21～12/25)

第9表 これまでに開催された企画展・特別展(移動展・巡回展を含む)(2)

年 度	特別展・企画展等の名称(期間)
平成17 (2005)	「女性の着物と装い-髪飾り・櫛と簪と帯-」(6/11~7/3)、「博物館収蔵資料展-生活用品を中心に-」(8/9~21)、「カストリ雑誌-戦後出版文化の一面-西島浩平コレクション」(8/9~21)、「新・十日町市の宝物-地域に息づく文化財-」(10/8~11/6)、「子ども縄文研究展」(11/20~12/4)
平成18 (2006)	「越後の布-暮らしの中の着物-」(7/22~9/10)、「梵字・曼荼羅展」(10/7~22)、「子ども縄文研究展」(11/23~12/6)、「博物館収蔵資料展-きものと資料と礼装展-」(2/16~18)
平成19 (2007)	「十日町のやきもの-縄文時代草創期、火焔型土器、そして素焼へ-」(8/25~9/24)、「残された雪国の記憶-雪国の暮らしを写す-」(10/6~11/4)、「出土品が語る新潟の歴史」(財団法人新潟県縄文文化財調査事業団共催・11/10~12/9)、「子ども縄文研究展」(12/22~1/14)、「博物館収蔵資料展-軸物を中心に-」(2/16~18)
平成20 (2008)	「十日町市の中世遺跡-発掘された集落・居館-」(8/12~9/15)、「岡田紅陽富士写真展」(10/11~26)、「博物館に寄託・寄贈された考古資料」(11/8~24)、「子ども縄文研究展」(12/20~1/12)、「博物館収蔵資料展-着物を中心に-」(2/20~22)、「雪文化三館提携事業「雪と人が織りなす文化」」(9/13~15・長岡市中央図書館)
平成21 (2009)	博物館開館・友の会設立30周年記念「縄文人の道具箱 野首遺跡展」(8/1~9/13)
平成22 (2010)	「織られるモノ-土偶・石棒・石皿からみた縄文の祭祀-」(7/31~9/5)、「信濃川上・中流域の縄文時代草創期遺跡」(11/2~28)
平成23 (2011)	「縄文のKAZARI-顔と飾る縄文人-」(7/30~9/11)、「十日町市内遺跡発掘調査速報展」(11/26~3/25)
平成24 (2012)	「四大麻布-越後編・奈良編・高宮布-楯中の糸と織り-」(7/21~8/19)、「異形の縄文土器」(9/22~11/4)、「昭和の残映-博物館に寄贈された昔の資料-」(2/2~3/3)、「縄文の華 十日町市の国宝・火焔型土器展」(8/3~9/30・星と森の詩美術館)
平成25 (2013)	「箱の中の虫-昆虫博士・種福清治氏標本コレクション-」(7/20~8/25)、「ビジュアル縄文博物館-縄文人の衣食住、そして土器-」(9/21~11/10)、「子ども縄文研究展2013」(1/18~2/16)
平成26 (2014)	博物館開館・友の会設立35周年記念「松代の石仏-里山の祈りと信仰-」(7/19~8/24)、「縄文前期のムラ 赤羽根遺跡-火焔型土器の出現前夜-」(9/27~11/9)、「子ども縄文研究展2014」(1/17~2/15)
平成27 (2015)	「カストリ雑誌とその時代-西島浩平氏コレクション-」(7/25~8/30)、「縄文後期の墓 栗ノ木田遺跡-縄文人の死と帯い-」(10/3~11/8)、「子ども縄文研究展2015」(1/16~2/21)
平成28 (2016)	「館蔵資料展 市民からの贈り物」(7/30~8/28)、「土器-つくりの考古学」(10/1~11/6)、「子ども縄文研究展2016」(1/14~2/19)
平成29 (2017)	「野首遺跡出土品のすべて」(7/8~8/27)、「新潟県縄文文化財センター巡回展「縄文の造形美-一反田南遺跡-」(7/8~8/27)、「動物の意匠-人と生き物のかわり-」(9/30~11/5)、「雪文化三館提携25周年記念展「雪と生活」」(9/14~11/20)、「子ども縄文研究展2017」(1/20~2/18)、「十日町のきもの歴史展」(5/3~4・十じろう)、「野首遺跡出土品展」(11/5・下条中学校)
平成30 (2018)	「十日町のきもの歴史展」(5/8~27)、「縄文土器線草-十日町市の土器いろいろ-」(7/28~8/26)、「機織りのムラ 馬場上遺跡」(9/29~11/4)、「子ども縄文研究展2018」(1/4~2/17)、「十日町のきもの歴史展」(5/3・十じろう)
令和元 (2019)	「十日町のきもの歴史展」(5/8~26)、「博物館開館・友の会設立40周年記念「博物館と友の会 40年の歩み」」(7/27~9/16)、「十日町のきもの歴史展」(5/3・十じろう)
令和2 (2020)	新館オープン記念夏季企画展「国宝・笹山遺跡出土深鉢形土器のすべて」(6/1~8/23)、「新館オープン記念秋季特別展「縄文の遺産-雪降る縄文と星降る縄文-」」(9/26~11/8)、「特設展示「昔の道具」」(12/19~1/24)、「冬季企画展「マジョリカお召と黒絵羽織」」(2/13~3/28)
令和3 (2021)	新館オープン1周年記念夏季特別展「形をうつす-文化財資料の新たな活用-」(6/1~7/4)、「夏季企画展「器の移り変わり-縄文から現代まで-」」(7/27~8/29)、「新館オープン1周年記念秋季特別展「岡本太郎が見て、撮った縄文」」(10/2~11/14)、「特設展示「昔の道具」」(1/4~2/6)、「冬季企画展「明石ちちみと十日町小唄」」(2/19~3/27)
令和4 (2022)	春季企画展「市民からの贈り物」(4/29~6/5)、「夏季企画展①「里山の石仏-松之山の祈りと信仰-」」(7/23~8/28)、「夏季企画展②雪文化三館30周年記念特別展「モノと芸術とヒトが織りなす雪国文化」」(9/6~9/25)、「本ノ木・田沢遺跡群国史跡指定3周年記念秋季特別展「縄文時代の始まりを探る」」(10/1~11/13)、「特設展示「昔の道具」」(1/4~1/29)、「冬季企画展「雪国の食-くものたり」」(2/18~3/26)
令和5 (2023)	夏季企画展「縄文の宝石-ヒスイ-」(7/22~8/27)、「秋季特別展「笑う縄文人-縄文人の喜怒哀楽-」」(9/30~11/12)、「特設展示「昔の道具」」(1/4~1/28)、「冬季企画展「究極の雪国 建ものがたり」」(2/17~3/24)

十日町市博物館研究紀要第3号

Bulltin of the Tokamachi City Museum, No.3 (March 2024)

ISSN 2437-0118

発行日 2024年3月31日

編集・発行者 十日町市博物館

〒948-0072 新潟県十日町市西本町一丁目448番地9